

「〇〇について」というタイトルで評論を書いてください (600 字以上)

タイトル：短歌で食い止める若者の日本文化離れ

若者の日本文化離れが続いている。ホントか？短歌についてはどうだろうか。周囲友人たちに短歌について聞いてみた。

「え？短歌って季語いらないの？」「5・7・5のやつだよね！」「一句詠んで！（短歌は首で数える）」というように短歌に対する認識はだいぶ誤っている。

短歌は5・7・5・7・7の韻律に言葉をのせて作る定型詩である。言葉はこのリズムに乗ることによって不思議と意味の魅力を増す。「危険の芽 見る目 気づく目 予知する目 みんなで築こう安全職場」これは安全衛生標語の平成18年度の入賞作品である。この標語は韻律を見てみると、5・7・5・8・7というように短歌の字余りの形式をとっていることが分かる。短歌の韻律は日本人の身体のリズムに自然となじみ、スローガンなどの日常に目にするところでも使われているのだ。改めていうべきことか？標語って結構七五調では？近年は自分の思ったことを短文で呟く SNS が流行している。自分の思いを短く効果的に伝えたいという点では SNS も短歌も同じ役割を果たせるのではないだろうか。そうか？飛躍してないか？

短歌に対する敷居は若者たちにとって高い。「短歌って古文に出てくるやつだよね。」「百人一首みたいなの。」というように、短歌は彼らにとってすでに過去の産物なのである。「過去の産物」か？この原因には現代短歌の認知度が低いことが挙げられる。若者たちは俵万智という名前と「サラダ記念日」という単語くらいしか現代短歌についての知識を持ち合わせていない。「ハンバーガーショップの席を立ち上がるように男を捨ててしまおう」「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまうといいの(俵万智『サラダ記念日』河出書房新社 1987年 22頁 32頁) というように今の若者たちの心にもきつと響くであろう歌がたくさんあるのだ。本当に響くか？まずは、現代短歌を知ってもらうところから、若者の日本文化離れを食い止めたい。解決策にしては無責任感。

ジャニーズの派閥問題について

テレビで目にしない日はないジャニーズ事務所のタレントたちであるが、興味のない人からすれば全員同じに見えるような彼らの間に、過去には存在しなかった、あるいは潜在的であった「派閥問題」という大きな問題があることをご存じだろうか。文長くて冒頭から何いいたいかわからない。ショート&シンプルに。彼らの間、というよりは正確には彼らのファンが抱える問題といえるかもしれない。

ジャニーズ事務所は言わずと知れた日本最大級の芸能事務所で、社長の「ジャニーさん」は誰もが知っているだろう。「誰もが」かはわからん。現在問題となっているのはそのジャニー喜多川派と次期社長候補とされる2人の女性、飯島三智派、藤島ジュリー景子派の3つの派閥である。簡単に言うところの派閥問題により各所属タレントの出演番組や共演者、活動のスタンスが固定さ

れる。特に飯島派と藤島派は対立しており、大きな歌番組でも 2 つの派閥のタレントが共演することはない。ソースは？少なくとも、具体的に各派閥に誰がいるのか示さないとわけがわからない。 ジャニー喜多川派は中立的な立場となり、比較的他の 2 つの派閥に比べると異なる派閥のタレントと共演する機会も多い。この事実の根拠は？信ぴょう性ない。

派閥があることの何が問題なのだろうか。派閥といっても、タレント同士の仲が悪いというわけではない。派閥を超えて仲の良いタレントも非常に多い。ジャニーズのファンは、自分が応援しているグループを好きな以外にも、グループを超えて仲の良い様子を見聞きするのが好きである。これは SNS でのファン同士の交流からよく読み取れる。しかし、派閥問題の存在によってこの機会が阻まれるのである。また出演番組が限られるということから、派閥によってテレビ露出の頻度が異なり、たびたびファンの間でも嘆かれている。具体性がないので何が面白いかわからない

事務所内に派閥があること自体は致し方ないのかもしれない。しかし派閥があることで得をしているのは派閥の中心人物だけで、彼女らの名誉のためとしか思えない。再びくだらない派閥闘争がなくなり、ファンが気持ちよく応援できるようになるのを望むばかりである。派閥の何が悪いのか具体的に。むしろ、派閥争いあるほうが客は面白いのでは。

○日常系アニメについて

日本のアニメに「日常系」が現れて久しい。まずは「日常系アニメ」の定義をすべき。「日常とは〇〇である」などと。「らき☆すた」「みなみけシリーズ」「けいおん！」とゼロ年代に主要な作品が登場して以降今に至るまで常に制作されているジャンルでありいわゆる「萌え 4 コマ」が原作となっていることが多い。

しかし日常を標榜するならば日本には「サザエさん」があり「ちびまるこちゃん」があり、ストーリーに今更取り沙汰されるような特徴も見えにくい。ここで言われる「日常」とはなにか。確かに数名のキャラクターが学校なり友人間なりで生活している様は「普通」である。大した事件や非科学的な要素もない。全体を見れば何の変哲もない「生活」である。しかしここで見ておきたいのが「日常と乖離している部分」である。

日常系アニメ作品中に見られる常軌を逸したテストの点数の低さや言動の幼さ、異常なテンションの高さは明らかに「日常」ではない。もっと言えば、我々の現実からすれば「異物」ですらある。しかしそのような「異常」な人物も言動も作中で浮くことはない。誰とでも仲良くしているし取り返しのつかないことになったり後に禍根を残すこともない。些細な要素をデフォルメし大袈裟に描いているとも取れるが、実は根が深い事項なのではないか。

視聴者は作中の出来事を微笑ましく鑑賞するとともにある種の共感を抱くのではないかと考える。それは視聴者自身が味わった疎外感であり隔絶感である。

平均を下回った、知らないことがあった、共感してもらえなかった……そのような細かい日々の孤絶感を日常系アニメは包摂する。登場人物になりきるのではなく、この空間、人物たちの仲間に入ればなんのすれ違いもなく受け入れてもらえる、という安心感がそこにはある。自分の思ったこと、感じたこと、言いたいことを全て受け入れてくれる(しかも美少女が)30分は理想的な

日常であり究極の「非日常」である。

日曜夕方之二作品との違いは、端的に言えば「怒られないこと」ではないか(無論「萌え」その他もっと他にも理由は有るはずであるが)。失敗が失敗でないという安心感が「日常系アニメ」なのである。

その包容力といわゆる「萌え」的な要素、そしてアニメをよく見る層(オタクと括ってしまうことは適当ではない)の親和性が非常に高かったことから、「日常系アニメ」は現在のアニメ業界におけるスタンダードにまでなったのである。

政治の喜劇化について

昔ツイッターを見ていたとき、野々村竜太郎元・兵庫県議についての「大喜利」や「ネタ」が流行っていたことがあった。政務調査費の問題を釈明するべく開いた謝罪会見は、その珍妙なやりとりや号泣などで一世を風靡した。最初こそ面白かったものの、だんだんそれが笑えなくなってきた。飽きたわけではなく、笑いに転化することが自分の中で難しくなってきたのだ。

我々の笑いはどこからやってくるのか。それは、物事の単純化にほかならない。ホントか?ある事象を「笑える」カテゴリに一度入れてしまえば、それはもう「笑い」を引き起こすことしか出来ない。「笑い」と常に抱き合わされている「諷刺」は背景に隠れる。こと「政治の喜劇」に関してはその傾向が顕著で厄介だ。

政治は、本来ならば高尚な営為である。民主主義社会を生きる我々には政治に対する信頼が不可欠であり、同時に政治も有権者たる人々を信頼する必要がある。この信頼関係が不幸な形で引き裂かれた結果として、我々は「政治」を笑い物にするのである。信頼を失くした我々は政治そのものへの関心を失って政治家の失態をあげつらい、政治家は国民の無知をいいことに開き直っていく。悪い循環が続き、ネット社会が拍車をかける。野々村元県議を巡る一連のネットでのネタ活動はその最悪の形態と言えるだろう。彼は最大の喜劇役者として世に出たのだ。

だが、それでいいのだろうか。国民は税金をそのような陳腐な笑いを得るために観劇料として払っているのか。民主主義は喜劇の題目に過ぎないのか。そして何よりも、それで誰が幸せになるのだろうか。このような疑問を投げかけざるを得ない現状こそ大いなる悲劇である。大上段から行っていることは伝わってきたが何が分析されなにか面白いのかわからない。

今回私はお笑いについて論じてみようと思う。数年前、お笑いブームが起こったのは記憶に新しい。1分程度の短い時間でネタを披露する番組が流行し、そこから多くの芸人が有名になった。しかし、現在はそうしたネタ番組の多くが終了し、「お笑い氷河期」と揶揄されることもあるようだ。だが、お笑いというのは日本ではそれなりに長い歴史のある芸であり、いつの時代でも需要はあった。では何故2010年頃お笑いは爆発的なブームを巻き起こし、やがてその流行は終焉したのだろうか。これらの問いに答えを出すために、まず、流行したお笑い番組のスタイルについて考えてみたい。当時流行していたネタ番組の多くでは、1時間の放送時間で各芸人が短いネタを披露するため、1回の放送で大量のお笑い芸人が起用されていた。つまり、お笑い芸人の大量生産・大量消費が行われていたということに他ならない。各芸人は大勢のライバルの中で特

定の支持・注目を集めなければすぐに使い捨てられてしまう存在だった。だが、短いネタの中で個性を出すことは難しい。使い捨てられるお笑い芸人が増えれば増えるほど、視聴者にしてみれば「どのお笑い芸人も同じ」ように見え始めたのではないだろうか。よくわからない。論理が飛躍している。短い時間の中でネタを行うこと自体が新しいのに、そこに付加価値をつけようとするのは難しいはずだ。初めこそ目新しさと人気を博した短時間のコントや漫才も、それぞれのお笑い芸人の個性を引き出すには向いていなかったのだと思う。お笑いブームの終焉は、視聴者が短い時間の中で披露するというネタ番組のスタイル自体を否定したことによって起こった現象ではないか。

○「文学賞について」

先日、毎年恒例のノーベル文学賞が発表された。受賞したのはフランス人作家のパトリック・モディアノで、長年に渡り候補者の筆頭として挙げられ続けている村上春樹は結局今年も受賞とはならなかった。ところで、日本でも毎年ノーベル文学賞の発表の時期になると各方面のメディアが注目し始めるわけだが、無論それはノーベル文学賞が持つ文学的価値よりも、村上春樹という一人の作家に対する注目とあっていいだろう。実際、この時期になると書店はこぞって「村上春樹フェア」なるものを前面に押し出したり、著名な作家や評論家が、村上作品そのものや、あるいはその受容のされ方について鼎談を行ったりもする。このようにノーベル文学賞は、少なくとも日本においては、真の意味での文学的価値よりも、現代の消費構造の中に組み込まれている側面が大きいと言える。

同じことは日本国内の文学賞に注目するとより顕著に見えてくる。日本の文学賞で最も有名な直木賞と芥川賞は、有名であるが故に、本=「単なる消費物」という認識を加速させてしまっている。対象ジャンルとして直木賞は大衆文学、芥川賞は純文学という一応の線引きはある両賞だが、ともにかつてのように、真の意味での文学的価値を認められた作品が受賞することは少なくなっている。例えばかつては、その年に受賞に値する作品が無いと判断されれば潔く「該当作品なし」にされることが多く見られた。その傾向は1980年代までは特に顕著で、例えば直木賞は70年代に九度の「該当作品なし」、芥川賞は80年代に同じく九度のそれがあった。それだけ文学作品そのものの価値が重視されていたということだと言える。しかし、ここ数年はそうした「該当作品なし」という結果も減多に起こらなくなった。これを単純に文学作品の価値向上として捉えることは出来ない。両賞ともに、確実に話題性を重視し始めたのだ。それはとりわけ芥川賞に見られる。こういう「例えば」は良い例えば、2003年下半期には綿矢りさが十代として初の受賞、2012年下半期には黒田夏子が最年長として受賞しているが、これは確実に話題性も考慮に入れての結果だと言えるだろう。

そして本を「単なる消費物」としてさらに広めさせることになったのが本屋大賞だろう。全国の書店員の投票によって受賞作が決められる本屋大賞の目的は、「売れる本を作っていく」ことや、「出版業界に新しい流れをつくる」ことだと大きく定められている。本屋大賞は、「とにかく本が売れば良い」ということを第一に実施されており、文学作品そのものの価値は全く二の次になっているのである。

ここまで見てきたように、真の意味で文学的価値のある作品に与えられる文学賞は少なくなつてしまったと言える。確かに、「本が売れない」と言われる時代で斜陽産業の出版業界が生き残っていくためには致し方ない現状であるとも言える。しかし、「内容」が評価されてこそ、それは真の文学作品と呼べるのではないか。ただ売ることだけを優先しては、文学賞の価値さえいずれ消え失せてしまい兼ねない。かつての直木賞、芥川賞のように、真の文学作品に与えられる賞を作っていくべきではないかと思う。

○東日本大震災の後、フィクションには何ができるか、という問いがささやかれる今日、文芸の世界では、2013年3月11日に刊行されたいとうせいこうの『想像ラジオ』が震災後の死者との関わりについて小説で向き合い、「キノベス!2014」一位、芥川賞候補作などに選ばれ、多方面からの評価を受けた。では、今日の出版業界でも大きな一角を占める漫画の世界では、「震災」とどのように関わっているだろうか。

まず、震災が起きた2011年から2013年における漫画の売り上げランキングを見てみる。紀伊国屋書店年間ベストセラー調査によれば、2011年度のランキングは、1位から4位を『ONE PIECE』（集英社・尾田栄一郎）が、『聖☆おにいさん』（講談社・中村光）、『のだめカンタービレ』（講談社・二ノ宮知子）、『君に届け』（集英社・椎名軽穂）、と続き、10位に『進撃の巨人』（講談社・諫山創）となっている。翌年度2012年度はやはり一位から四位を『ONE PIECE』、そして前年度と同じく『君に届け』、そのあとを『テルマエ・ロマエ』（エンターブレイン・ヤマザキマリ）が、9位、10位が『銀の匙 - silver spoon -』（小学館・有川弘）、『NARUTO』（集英社・岸本斉史）となっている。ここまでのランキングでは、上位作品は『ONE PIECE』、『君に届け』といった作品が一定のランクインを重ねており、この作品に割って入って来る作品はない。ところが、2013年度になると新たにランキングを占拠する作品が登場する。言わずもがなではあるが、その作品というのは、『進撃の巨人』である。2013年度ランキングを見てみると、一位から三位は相変わらずONE PIECE、四位には『坂本ですが?』（KADOKAWA・佐野菜見）が、そして六位から十位、十一位から十八位を『進撃の巨人』が占拠しているのである。『進撃の巨人』の人気は同じく紀伊国屋書店の電子書籍部門を見ても明らかで、こちらは一位から十一位すべてに『進撃の巨人』がランクインしている。『進撃の巨人』は、2009年に別冊少年マガジンで連載がスタートし、2013年4月にアニメ化され、大きな反響を呼んだ。2013年度に売り上げが伸びたのは、このアニメ化の影響が大きいと思われるが、ヒットの理由は本当にそれだけだろうか。

ここで進撃の巨人のあらすじを述べておこう。人類は巨人と呼ばれる生物に捕食され、円状につくられた「壁」の内部での生活を100年間余儀なくされている。845年、100年の沈黙を破って通常より何倍も巨大な「超大型巨人」が壁を壊し、人類は再び巨人に食べられる恐怖と共に生きることになる。家族を食べられた主人公のエレンは、壁の外を調査する「調査兵团」に入隊し、仲間が次々と食べられる中、巨人の謎に迫るとともに、巨人の駆逐に闘志を燃やす。

「超大型巨人」が突如現れる直前、エレンの幼馴染アルミンのセリフで印象的なものがある。「100年壁が壊されなかったからといって、今日壊されない保障なんかどこにもないのに…」つ

まり、「あの日」突如壁が壊されたのは、エレンたち人類にとってもはや「想定外」の出来事であったわけである。これと同じ状況を、私たちは容易に想像することができるだろう。「東日本大震災」である。

津波の高さも、そこから引き起こされた原発事故も、「想定外」という言葉で説明されたのを、多くの人が覚えているだろう。絶対に安全だと信じられていたものがあつというまに崩れ去っていく感覚を、多くの日本人がテレビの映像を通して感じた。『進撃の巨人』で壁から「超大型巨人」が顔をのぞかせる光景は地面の向こうから津波が押し寄せてくるあの風景を彷彿とさせるかもしれない。

震災前の漫画、及び漫画原作のアニメにおいて目立ったヒットには、2010年度オリコン調べで、Blu-ray Disc ランキング総合首位を獲得した『けいおん!』が挙げられるだろう。『進撃の巨人』と同じく原作漫画と共にアニメ化によって人気を博したこの作品は、軽音部の女子高生が日常を過ごす、いわゆる「日常系」である。しかし、2014年現在、今の私たちはもうその「日常」を信じることができなくなっているのかもしれない。なぜなら、絶対的な「日常」が破壊される様を、確認してしまったからである。だからこそ、壁の中の「日常」の破壊が真正面から描かれた、『進撃の巨人』が人気を博したのではないだろうか。『進撃の巨人』は、巨人の「食べる」という行為をもってその破壊を生々しく突きつけてくるのである。

ところで、その「食べる」という行為において『進撃の巨人』とつながる作品がある。それは2011年から週刊ヤングジャンプ（集英社）にて連載された石田スイの『東京喰種』である。人を食らう怪人「喰種」となってしまった人間、カネキがその人間と喰種の狭間で世界のあり方を模索し続ける、ダークファンタジーである。感情移入すべき主人公が人間の敵である喰種である点で、『進撃の巨人』よりも複雑な構造といえるかもしれないこの作品は、まさにこの主人公においても、『進撃の巨人』と重なる点がある。実は、『進撃の巨人』の主人公であるエレンも、人間から巨人の変身することができるのである。つまり、この二作品の主人公は人間と、それぞれの作品で人間と対立している生物の間を揺れ動くアンビバレントな存在なのだ。

東日本大震災によって、私達は「日常」の破壊を経験した。しかしそれと同時に、絶対的な「味方」だった原発が「敵」となったように、「味方」と「敵」の区別さえも曖昧なものとなったのではないだろうか。エレンやカネキのようなアンビバレントな存在は、「日常」が破壊されることで浮き彫りになった「不安定さ」ともいえるものを体現している存在なのである。

私たちは「あの日」、一瞬で「日常」が破壊されるとともに、たくさんの命が呑み込まれるのを目の当たりにし、心を痛めたことだろう。『進撃の巨人』や『東京喰種』は、その時の、信じていたものが打ち砕かれる感覚、そして自分たち人間がどうしようもできずに「死ぬ」という驚きを真正面から描きだした作品といえるのではないだろうか。もちろん、連載時期から言っても、作者がそれを狙って描いたということはありません。しかし、その生々しさを、この時代の人が受容していることに関連がないとは言い切れないのである。

それぞれの要約が過不足ない。批判的な、読者に気付きを与える読解ができています

妖怪ウォッチについて

先日、話題の「妖怪ウォッチ」のアニメを初めて見た。今まで私はこの作品の主題歌やジバニャン(キャラクター)にしか触れたことがなく、内心では自分が慣れ親しんだ「ポケットモンスター」(以下、ポケモン)の方が面白いし、どう違うのかがあまりわからなかった。しかし、そこには大きな違いがあり、「妖怪ウォッチ」はとても「今っぽい」と感じたのだ。

「ポケモン」は、主人公が味方ポケモンを召喚し、敵ポケモンを攻撃して戦う。つまりは、ポケモン同士が直接対決をしてその勝ち負けが結果として現れるのだ。一方の「妖怪ウォッチ」の基本ストーリーは敵妖怪が人に取りついて悪さをし、それを主人公が味方妖怪を召喚して解決するといったものだ。味方妖怪が敵妖怪に直接攻撃をして倒すのではなく、自らの能力で取りつかれている人に作用をして敵妖怪を撃退するのである。つまり、「ポケモン」と違って妖怪同士は戦わないのだ。

作品を見ている私達からしたら、「妖怪ウォッチ」の解決の方法は回りくどいに見えるだろう。実際に私と一緒にアニメを見ていた父親は、「直接攻撃すればいいじゃん」と言っていた。しかし、この戦い方だからこそ今の子供たちに支持されているのだ。なぜなら、この構図はそれぞれの時代の「戦い」の構図と同じだからである。

面白い方向にいきそうだが、説明足りず飛躍しているように見える。

「ポケモン」はいわゆる「代理戦争」型の戦いである。主人公(米ソ的)がポケモン(ベトナムや朝鮮的)を操作して戦わせている。「ポケモン」の放映は〇〇年であり、その当時は冷戦構造が崩壊してすぐで、まだその戦い方をプロトタイプとしてまだ人々の心に根付いていた時代ではないか。

そして、「妖怪ウォッチ」は「ハッカー」型の戦いである。主人公は悪さをしている人(操作され害を撒き散らしているパソコン)の裏にいる妖怪(ハッカー)を直接攻撃するのは難しく、対症療法として悪さをしている人を元に戻すといったことしかできない。先読みして攻撃を止めるのではなく、攻撃の影響をマシにする戦いで、それはたちごっこである。

おそらく「妖怪ウォッチ」が「ポケモン」よりも今の子供たちに支持されているのは、「妖怪ウォッチ」に潜むそのような戦いのリアリズムではないか。

2001年にジミー・ウェルズ(米)が英語版を発足し14年。ゼロ年代以降インターネットの急速な発達により様々な文化が変容していった中でウィキペディアという存在はとてつもなく大きいものになった。そしてまたインターネット文化の一番のシンボルであるように思える。資格制限がなく、匿名での編集が可能、また投稿履歴も公開されており地球の誰もが、全人類の知識を集めた宝庫へいつでもアクセスできる。編集の動機は至って簡単で自分の知識の披露というのが一番であろう。

自己顕示欲によって生み出された百科事典は様々なジャンルに精通し、結果的に 31,418,020 (2014/5/1) 記事に膨れ上がっている。

日本版のウィキペディアはとくにサブカルチャーの項目が充実しており、とても深くまで言及されている。オタクやマニアが事細かに書いていくので専門的すぎるかもしれないがそれもまたウィキペディアならではの楽しみ、強みである。気になることは関連項目のリンクから飛べてそれだけで一日中費やしてしまう。知の欲求をくすぐられるのだろうか。もちろん今は廃れた文化もウィキペディアの中では生きている。従来の百科事典や本、はたまたウェブニュースや個人のブログにまで載っていない事細かな文化的要素もウィキペディアには残っている。それらはインターネット・アーカイブによりこの先何百年もインターネット上に残り続けるであろう。文化のホルマリン漬けとでも呼ぶべきなのか。

リアルタイムで世界の様々な事柄が匿名によって今もなお更新され続けている、ただウィキペディアを資料の糧として見るのではなく、文化的にもとても重要な作業が行われているという事を認識して使って行って欲しい思う。

リニア新幹線の建設について

国土交通相が 10 月、リニア中央新幹線の工事計画を認可した。これを受けて、JR 東海は、年始に着工するつもりようだ。リニアの建設計画では、山梨、静岡、岐阜にまたがる南アルプスを全長 25 km のトンネルで貫くことになっている。これは南アルプスの自然を破壊することになる。さらに安全面でもリスクがある。

リニアが貫くのは、南アルプスの最深部、大井川源流の付近である。ここには貴重な大自然が残る。日本アルプスの大半が人の手が加えられているが、南アルプスの最深部は、人があまり入らず、そのままの自然が残っている。周りに山しかない山は、ここ以外にはほとんどない。それを壊してしまうのか。

安全面でもリスクが高い。南アルプス山々は崩壊が進んでおり、登山ルート集にも、多くの大崩壊地が書かれている。有名なのは、荒川岳の大崩壊地など、標高が高くよく見えるところに位置している。しかし、実際に南アルプスを歩いてみると、標高の低い登山道の周りでも岩雪崩や土砂崩れ跡を何か所も確認できる。特に激しいのは南アルプスの南部だ。リニアのトンネルが通る箇所も、南部にある。地盤の脆弱さが大きなリスクだ。

環境アセスメントが不十分な印象だ。JR と国交省には、実際に南アルプスの山に足を運んで、自分の目で確かめてほしい。計画を変えろとは言わないが、何か気づくことがあるはずだ。そこにある美しい自然と、その特性、弱さを知る必要がある。3.11 で安全神話は崩壊した。リニアとトンネルについても、よく考える必要がある。

「批判だけ」で内容うすい。そのような批判を踏まえた上で動いている現実も書くべき。

テレビというメディアについて

「おわこん TV」というドラマが今年 NHK によって制作された。テレビは終わったコンテンツ、いわゆる「オワコン」だという主にインターネット上で繰り広げられる主張を踏まえてのも

のだろう。このドラマの原作となった小説のタイトルは「チョコレート TV」であるため、NHKがあえてこのタイトルに変更したことがわかる。ここから見えてくるのは、インターネットの普及とともに変化してきた、テレビに対する人々の態度への、製作者側の不安や焦りだ。

ここ十数年の間に視聴率の低迷やフジテレビへの嫌韓デモなど、そんなに重要か？目に見える形でテレビを取り巻く環境は変化してしまった。報道内容は偏向的と批判され、売国企業とまで言われる始末だ。その他コンテンツ能力の低下も指摘されており、現に私の周囲にもテレビをほとんど見ないという人は多い。根拠薄い数十年前に「憧れのきれいな世界」を見せてくれた魔法の箱は、今や「低俗で偏った世界」を垂れ流すものへと落ちぶれてしまった。

こうした世間の批判的な目を意識してか、最近はコンテンツの形態が変化していると私は思う。以前まではいかに面白く完成度の高い番組を作るかといった試行錯誤が見られたが、近年ではあえて完成度の低い物を作り、いかに視聴者にツッコミを入れてもらうかを重視しているように思う。具体性ないこれは単に「つまらない番組」ということではなく、「ツッコミどころのある番組」ということだ。有吉やマツコの躍進も、このコンテンツ形態の変化とともに必要となってくる、「なんだこのくだらない VTR(企画)は！」と視聴者の代弁者としてツッコむ役割をうまく演じているからだろう。

こういった趣向の番組は一定の評価を得ているようだが、私は単なる一時しのぎにしかないと感じている。テレビというものが再び復活するためには「批判される対象」という現在の立場から脱する必要がある。視聴者に「批判する(ツッコむ)楽しさ」を味わわせるのではなく、面白い番組を「受け取る楽しさ」を感じさせるような番組制作をすべきである。このままテレビがボケて視聴者がツッコむという形を続けていけば、本当にテレビは近い将来「オワコン」になってしまうだろう。

ビジネスについて。

ビジネスとはなんであろう？私は現在学生をやりながら、情報ビジネスを展開すると同時に web マーケティングを勉強している。

今まで詐欺師的な人もたくさん見て来たので、ビジネスとはなんであろうという疑問がついて回った。

資本主義の元、弱い者は強い者に食われる構図は多少なりとも受け入れてはいるが、どうもただ、お金を生む事だけにフォーカスをして人を欺くことには納得がいかない。

ビジネスはお金を生む事 という定義だけでは不十分かつ健全的ではないように思える。

ビジネスをやってく上で一番重要なことは継続的な収入ではないだろうか？ただ一括で大きいものをもらってもいいが月の収益が不安だと生活にいずれ困ってしまうことは目に見えている。なのでいかに継続的に毎月キャッシュが入ってくるか、がビジネスする上で重要なポイントだと想う。

ではどうやったら継続的なお金が入ってくるか？新規顧客を取り続けることはなかなか難しいのでまずは、既存顧客の満足度を上げることが重要なはずだ。満足度を上げるためには、代価としてもらったお金とそのニーズを満たしたサービス、コンテンツの提供すれば、「ファンにな

ってもらえる」のでこちらが商品さえ作れば継続的な取引ができるようになるはずである。ゆえにビジネスとは「価値と価値の提供」だと定義づけることができるのではないだろうか？顧客のニーズをしっかりと捉えて、それに見合ったサービスを提供することが大事なのではないだろうか？

せっかく実践していて具体的なことを見ているはずなのに一切具体性がなく読んでいて何も得られない

○ —大学入試制度について

私は第一志望で早稲田大学に来たのではない。本当に行きたかった大学、それは言うまでもない、東京大学である。私の大学入試の経験を通じて感じた、日本の入試制度への疑問を以下に述べたいと思う。なお、これは東大生に対するジェラシーのような気持ちから書いているということではないことを理解していただきたい。

一昨年(2017年)の3月10日、東大公式ホームページには私の受験番号はなかった。「負けたな、、、」 精一杯の受験勉強をしたので悔いはなかった。しかし敗因が知りたかった。得点開示を行い、塾の同期の友人とも沢山話した。それを通じて私なりに出した結論、それは「帰国子女への敗北」であった。私が高校時代、塾で仲良くしていた仲間は10人であった。彼らのうち、7人が合格した。全員帰国子女であった。私を含めた残りの3人はそうではない。さらに、私の高校から合格した人も1人を除き、皆が帰国子女であった。合格した彼らに、「受験期は本音は言えなかったかもしれないけど、ぶっちゃけどのくらい英語は勉強してたの？」と聞いてみた。彼らは全員口をそろえて言った。「週に一回くらいかな。英語はやらなくても忘れない程度で大丈夫だった。その分の時間を暗記科目にあてていた。」 衝撃的な答えだった。塾の先生に言われた通り、毎日英語に時間を費やした私。笑えてきた。面白いことに、その合格者たちの友人で合格した人のほとんどが帰国子女だとも言っていた。興味が湧いたので、他教科の得点について尋ねてみた。すると英語がダントツに高いのはさておき、力を入れたとっていた社会が安定して高く、他の2教科、つまり国語と数学は皆、模試の基準でいうところの合格ラインとは言えぬものであった。

東大以外の大学にも目を向けてみよう。例えば慶応大学。私は受けていないため、実際のところはよくわからないが、多くの人が英語さえできれば入る、という塾の先生も慶応は英語の配点が高いから帰国子女が受かる可能性は高い、などと言っていた。

以上のことを踏まえて言えることは、大学入試において過度に英語に比重が置かれている、もしくは帰国子女にかなり有利な入試が存在するということだ。実際の合格者の割合を調べたわけではないし、私の周りでたまたま帰国子女が多かっただけかもしれない。しかし英語への大学側の期待がとても大きいことは確かであると思う。確かに、グローバル化とつっこいくらいに言われ、社会で英語力が重要であり、これからその力が問われることは言うまでもない。しかし小中高の教育ではそんなに英語重視の教育を受けた覚えはないし、とくに国立大学では多くの科目が課される。大学側は入試で何がしたいのか。単に英語ができる人材がほしいのならば、それに合わせて教育制度も変わっていくべきである。

今の時代の大学は受験生に何を求めたいのか。そして私を落とした東京大学は、何を求めていたのだろうか。

点数具体的にしたり、もっと「帰国子女の勉強不足」を象徴するような、主張を強化するエピソードがあるとよい。ただ、切り口は面白い。「東大へのジェラシー」の文もいいが、中途半端。これなら、ない方がいいし、書くならもっと東大への恨み辛みをにじませたりすると面白い。

SNS について。

たとえば **Facebook**。今やアクティブユーザーの数は世界で十億人を超えているとまで言われ、各ユーザーは自分の体験した出来事や感じたことなどについて「友達」と共有し、「いいね」をしたりコメントをしたりすることを通して交流を深めている。それを行わないことが今や一つの選択となっていること、つまり **Facebook** を選ばないという選択をしたということが一つの悪とさえみなされうるという現状も非常に興味深いところだが、本稿ではこのところは措くとする。

しかるに **Facebook** には「いいね」の機能こそあるが、一方で「悪いね」——YouTube の「dislike」にあたる機能は存在しない。**Twitter** もまた同様である。もちろんこの機能があったところで、一般に使われることはないだろうし、僕も友人の投稿についてバッシングをしようとは思わない。

しかしこのことは、昨今隆盛を極めている SNS を成り立たせている、ある構造の存在を示唆することになる——すなわち、ある記事／意見に相対したとき、そこにおいて表明しうる態度は賛同か無関心かのいずれかでしかありえないということである。

「優しい」制度とでも呼びうるであろうこの構造は、人々に批評なき空間を用意する。もちろんこれは **Facebook** がある種匿名性を排し、ネット上でのアカウントと現実的な存在との同定を前提としたものであるということが関わっている。つまり 2ちゃんねるを始めとした匿名の電光掲示板とは違い、ネット上での書き込みがそのユーザーをアイデンティファイしうる肉声として機能することが、「否」の声を発しにくくしているのである。

このこと自体を悪いことであると言うつもりはない。人間はその匿名性が確保された瞬間に野蛮人へと変貌しうるということは、既に数多の事例が示唆する通りである。僕が危惧するのは、その批評なき空間の中であって自己を演じ、それが共有されることを通して自己のイメージを拡張して充足せざるをえない人々の心性が、ある種必然的なものとして現代に蔓延していることである。

他者存在の恐怖を説いたサルトルは、果たして電車の中で眠る若い女性を想像しえただろうか？ ましてその彼女がおもむろに起き出して、スマートフォンで **Facebook** か **Twitter** にアクセスし、

隣に座る人の様子など意にも介さず友達の現況に「いいね」を押すという義務 こういう「無邪気な人々に冷水浴びせる」切り口はとても批評的を果たすその光景は？ 他者を恐れ、他者を排除するだけでは飽き足らず、「友達」からもその他者性を徹底的に排除しようとする これもいい。 こういう切り口を軸に、SNSで起こった事件や身の回りの人のコメントをまとめこめばよかったかも ことに充足している、そのありさまは？ ……。

SNS というものそれ自体の善悪を論じることは出来ない。ただし、それが照射する現代人の心性は見据えるべきものであるし、その是非も問われねばならないものである。一方で、なら SNS を捨てればいいのかというそうではない。今や SNS は情報発信の場として、あるいは拡大する世界の中でバラバラになりがちな友人との交流を深めるための手段としてなくてはならないものともなりつつある。必要なのはそれがあくまで一つの手段にすぎないことを自覚し、自己表現の多様なあり方を許容することである。

「地方から始まる政治の閉塞感について」

小淵優子経産相の辞任は、議員としての辞任問題や、追及する野党と、被害を最小限にしようとする与党というお決まりのストーリーになっている。一方でマスコミは「辞任で済まさず、追及しなくてはならない」という理念に燃えている。マスコミでもよりお茶の間向けの画面からは、「またカネの問題」「早く普通の政治の仕事をちゃんとやってくれないか」という国民のあきれ感情を先取りするようなコメントが続く。国民にとっては、「またカネ」発言も、すでに聞き飽きた決まり文句になり、すべてが日々の生活の中でのBGMになっていく。

この閉塞感・お決まり感、現状でホットな問題を抱えた地域にとっては、さらに、ホットな問題をそのまま凍らせて遺物となってしまったような諦観を与える。70年代後半以降の保守政権の持続はそのような諦観の中から「自分の目の前の生活」だけは守ろうとするエゴとそれによる消極的な指示によるものである。思えば、珍しく政権交代の起こった2009年の選挙の時でも、民主党は公共工事の中止を掲げながらも八ッ場ダム建設当地のある群馬5区には候補を立てず直接対決を避け、そこで盤石の態勢で予想通り当選したのが小淵優子・少子化相（当時）であった。民主党はすでに地元民の「目の前の生活」保持の延長にある工事続行の意向を、無視できない、地元勝負では勝てないとみなして候補者を立てないという挙に出たのであった。地元を置き去りにして、中央での結果をもって、地方を変えて広告塔にしていく、という、地方の人々を無気力にさせる流れが続いている。今回の福島知事選でも、争点が見えず、中央の意向をもって大局が決まっていく。

地元置き去り、は、確かに大きな問題であるが、それ以上に、政党の中心が地元置き去りにせねばならないほど、「目の前の生活」保持意識は強い。この意識を取り込むような道を見せられない政党は、どれも同じであって、結果、より確実な保守系を選ぶしかないのである。しかし、保守系を選んだところで、地方の人にとって事態は同じ方向に進むしかない。すでに問題が起きているから争点になるはずであったのであって、そこが結果として同じであれば「目の前の生活」保持は強くならざるをえない。悪循環である。

中央の政府や地方からの電力供給などの中で生きている中央の国民は、もう一度、争点となっている地元に目を向け、選挙や国政の動向を地方の問題と直接照らし合わせねばならない。閉塞感、地方から始まり、中央へとやって来る。

色々書いてあるが、何が新しいかわからない。データ（数字やコメント）入れて展開するとか必要かも

本、特に小説が好きな私にとって、現在の文芸が非常に商業主義的であることに、深刻な危機感を覚えている。もちろん、出版社やエディター、批評家に小説家も、携わっている本が売れなければ生活することが出来ない。だが、現在の大衆文学は作品の物語性と表現能力が、どこかおざなりにされていると断言できる。現在の新人賞を求めてみれば、なるほど、確かに作品性が高く、想像力を実に働かせる逸材がきらりと光っているのは間違いない。しかし、そういった評価されるべき小説家が数年内に、別の、それこそ圧倒的多数に存在する商業的な作品に押され、その光を失いつつある現状からは、目を背くことが出来ない。なぜ二次創作に於けるような「テンプレート」的作品が跋扈し、芥川賞などに見る稀代に「絶品のへんてこ」が隅に追いやられているのか考えると、そこにはインターネット等のメディアが関係してくる。明治後期から昭和初期、太宰の死に至るまで、小説の「価値」は絶頂に達していた。小説自体がステータスであったが、それは活版印刷の驀進により円本に見るような資本主義的なものに変化し、その価値は失われつつあった。説明足りない。根拠は？とは云え、文芸全体のレベルが落ちたかと問えば、まったくそうではない。新しい表現を取り入れつつ、戦後の新人は急成長を遂げた。しかし、小説やSS（ショートストーリー）が無数に蔓延り、一冊一冊本を買う必要が無い上に、「精読」する以上に物語があふれている現代に於いて、小説は一方的に「消費」されているのである。読者は小説を読むのではなく「消費」し、出版人は小説を執筆・編集するのではなく「生産」しているのである。需要と供給の因果からは逃れられないとはいえ、第三者の視点に立って、もう一度小説の在り方を見定める必要があると私は思っている。

○映画『ウォッチメン』。公開は二〇〇九年。監督は『300』などで知られるザック・スナイダー。そして原作はなんといっても、あのアラン・ムーアである。

結論から言えば、この映画は「現実世界にヒーローを登場させるとどうなるのか」という映画だ。アメリカン・コミックが元になって作られた映画だが、いわゆるアメコミ物といった内容ではない。何の前情報もなく、アメコミが原作だと聞いてこの映画を観た観客は、内容のシリアスさに面喰らうはずだ。

『ウォッチメン』の舞台は冷戦真っ只中の一九八五年。ニューヨークの高層ビルからひとりの男が墜落死するところから物語は始まる。男の死を調査するのは覆面の男ロールシャッハ。死んだ男はロールシャッハの元仲間、長年ヒーローをしていた「コメディアン」ことエドワード・ブレイクだった。突然のヒーローの死を不審に思い、その死の謎を追うロールシャッハが辿りついた真実とは……。

というのが、『ウォッチメン』のあらすじだ。ロールシャッハやコメディアンといったヒーロー

はコスチュームに身を包んでいるものの、その中身はなんの超能力も持たない普通の人間だ。彼らは法では裁けない悪党を暴力で制圧する。だから、その行きすぎた暴力は守るべき市民からも反発される。ヒーローたちの活動は法によって規制され、彼らは引退を余儀なくされる。そんな中で物語は始まるのだ。

この映画に登場するヒーローの中で唯一本物の超人がいる。その名も Dr.マンハッタン。この男は科学実験の事故に巻き込まれるも、原子を操る力を得ることになる。その力は絶大でテレポートや空中飛行、同時に何カ所にも存在でき、核爆弾ですら無効にしてしまう。この男の存在が米ソ間の緊張を高めることになる。なぜなら、彼はアメリカ人だったからだ。物語が進むにつれて謎が謎を呼び、アメリカとソ連の対立も深まっていく。

この映画が提示するのは「正義とは何か」ということだろう。ヒーローの死から始まる一連の事件の真相を、登場人物たちの行く末を知ったならば、観客は相当な衝撃を受けることになるはずだ。最初から最後まで、一六三分間、この映画を観た者にとっては「Who watches the watchmen?」というテーマは、相当意味深いものになるはずだ。

すべては語りきれないので、ぜひ DVD をレンタルして自分の目で観てもらいたい。できれば、その感想を聞いてみたい。

△ 「介助者」が「仕事」として成立したのはごく最近である。

2000年、介護保険制度が成立。2003年に支援費制度が確立した後、やっと「介助」は「仕事」として認識された。介護を無償で、ボランティアとして行っていた時代から、様々な社会運動の末、「仕事」へと変わった。

「仕事」として認識されたが、非正規雇用化やフリーターの増加など問題がある中でも、介助者になりたい！と夢を持って仕事に就いた人はほとんどいない。

介助とは――。24時間365日の対応が必要。確かに言われてみれば当たり前のことだ。24時間営業年中無休、いったい他にどこの会社員が同じだけ働いているのだろう。

介助者には「感情労働」が付きまとう。定義を入れる。休んではいけないということ、利用者のニーズを拒んではいけないということ、己を出してはいけないということの3つである。「己をだしてはいけない」とはどういうことか。高齢者介護における利用者の心や体調に気を配る、いわゆる「気付き」は障害者自立生活運動定義を入れる。では邪魔とされている。介助とは障害者自身が自分にとって必要なことを介助者に「させる」ものであり、「気付き」で先回りしてやってしまうことは、社会人生経験を奪ってしまうとされる。

自分を持たずに人のために介助する。自分を持たずに「仕事」をする。これでは、介助者という仕事が「仕事」として認識されたにもかかわらず、そこを目指そうとする人がいないという理由として納得がいく。しかし、全ての人に地域での自立生活を保障するには障害者自身の家で介助することが絶対である。障害者自身に合った介助者、そして24時ついていてくれること「パーソナルアシスト」が求められる。介助者と障害者はどのように関わるのが大事なのだろう。仕事として憧れを持たれるようになるにはどう改善していくべきなのだろう。関わるのが人與人であるからこそ問題は大きい。

【参考文献】

渡邊琢（2011）

『介助者たちは、どう生きていくのか ―障害者の地域自立生活と介助という営み』

生活書院

もう一步興味ない人も興味持てる踏み込みあったらいい。おいしい。

インターネットを見ていると、よく「文系は遊んでいて、理系は暗くて真面目」という趣旨の書き込みを目にする。また、それに関連して、「文系は生死のかかった場面や、実生活で役に立たない」と揶揄されることもある。著しく偏った意見であることは言うまでもないが、そうか？ 文系意味ないという感覚は一定の人に共有されているからそういう議論出るのは？文化や教養が生きていくうえで必須ではないことも確かだ。本を読んでも腹は膨れない。もったもである。しかし人は、パンのみによって生きるわけではない。文化や教養は無駄を必須条件にして育つものであり、その無駄こそが人間を人間たらしめている。そんな文化の中でも、比較的最近になって生まれたものがある。それがサブカルチャーだ。飛躍している。サブカルである必要あるか？サブカルチャーは絵画やクラシック音楽などのメインカルチャーに対する傍流だが、非常に儂い命でもある。サブカルチャーは生まれたときから、消滅する大きな可能性をふたつ持っている。ひとつはメインカルチャーに吸収されてしまうこと。サブカルチャーとして栄えれば栄えるほど文化に染み込み、いつしかメインカルチャーになっている。ふたつめは商業化の波だ。地下であっても人気を博し、経済が動けば、それはすぐビジネスへ換金される。いつの時代も、サブカルチャーはこのふたつの大きな敵に潰されてきた。両者とも、コアなファンが逃げってしまう原因であることが、サブカルにとっての脅威となる。

今、日本は世界に「クールジャパン」を発信していこうとしている。しかし、どこかちぐはぐな印象を受けるのは、クールジャパンの中に多くサブカルチャー含まれているからだろう。なにがどうちぐはぐなのかわからない。「自分の感覚」は、根拠持って「相手の感覚」に伝わるように説明する必要ありサブカルチャーを日本政府という「メイン」な存在が認め、推進する状態は、多大なる矛盾を孕んでいるのだ。サブカルを殺さず育てていくためには、多くの時間と細やかな手助けが必要となる。

「仮面ライダーについて」

今月 10 月より仮面ライダーの新シリーズがテレビ朝日にて日曜日 8:00 より放送されるようになった。その名も「仮面ライダードライブ」である。私のタイトルから疑問を感じてならない。仮面ライダーは現在までに 30 作品以上存在するが、どれもバイクに必ず乗る。しかしながら、この「仮面ライダードライブ」はバイクには乗らず車に乗るとというのがコンセプトのようだ。これはいかななものかと感じる。これでは“仮面ドライバー”ではないだろうか。元々仮面ライダーは故石ノ森章太郎氏のメディアミックス作品であるが、2000 年より毎年放送される“平成仮面ライダーシリーズ”は全て石ノ森章太郎氏の死後に作られた作品である。そのため、独自の進化が進んでいった。昔の仮面ライダーを見ていた人からしたら「本当に仮面ライダーなのか」と

言われてしまうのではないかと感じられるほどである。しかしながら、製作も初代の仮面ライダーのイメージを失わないよう、かつ新しいものを取り入れて飽きられないようにと努力しているようで、2000年からの仮面ライダーのオープニングでは最初のクレジットに“原作 石ノ森章太郎”を入れている。そんな中、ついに石ノ森章太郎氏生前の仮面ライダー作品数を死後の仮面ライダー作品数が越した。作品ごとの独自性を大切にしてきた平成仮面ライダーこそが真の仮面ライダーとなりつつある今だからこそ、バイクを乗らない仮面ライダーを作れるのだろう。しかし、石ノ森章太郎氏は根本の要素を崩しても仮面ライダーと呼ぶ作品を許すのだろうか。バイクのない仮面ライダーの今後に対し、わずかばかりの期待に賭けたい。

表面的すぎ。何の興味も持てない。なんで車か、このストーリーの何が面白いのかなどかくべき

現代社会と考古学について

考古学という学問をご存知だろうか。人によって様々なイメージがあるだろうが、一般に考古学とは物から人類の歴史を考えていく学問と定義される。マイナーな分野ではあるがこの考古学は実は現代社会に深く関わっているものであり、今回は現代社会と考古学の関わりについて述べていきたい。

約7000件、この数字は日本で一年間に行われている発掘の数である。1年を通して毎日どこかしらで考古学による発掘調査が行われているのだ。この数字のうち大半を占めるのがいわゆる緊急調査と呼ばれる発掘調査である。これは建物等を建てる際にその地下の遺跡の有無を確認し、遺跡が存在した場合それを対象に行われる調査のことを指すものである。

日本には数多くの遺跡が点在し、早稲田大学の中央図書館の地下にも江戸時代の遺跡が存在したことが確認されたり、中央区で江戸時代の墓が確認されたりと都会の真ん中にもかつて暮らした人々の痕跡は残されている。

緊急調査の目的は工事によって破壊される遺跡を記録保存するという点にある。そこにかつて人が暮らしたという痕跡は工事によって失われる。その前に調査を行うことで保存はできなくとも、データとして後世に残すという目的に沿って行われているのだ。

そのために各地方自治体には埋蔵文化財担当の専門職員が在職しており、遺跡が無意味に破壊されないような体制が整えられている。

認知度は低いものの考古学は身近なところで多くの人々の暮らしにかかわっている。今我々が立っている地面の下には過去の日本人たちの生活が残されているかもしれない。

紹介としてはわかったが「So what?」

障害者に対するケアについて

第一級障害者など、文字を書くこともままならない人が多くいる中で、事故後の彼らの生活に疑問を感じることが多い。例えば結婚していない人が事故に遭い、父母もすでに他界し身寄りがない中で一体だれを頼って生きていけば良いのか…。私の父は第一級障害者であり、障害者手帳も持っている。そのこともあり、病院へ行く機会は少なくなかった。そこでよく目につくのは、い

つでも見舞い人もいなく、ベッドの周りには写真や花もないような入院者だ。身よりのない知的障害者は施設などで金銭管理も含め最低限の人生を送ることができる。しかし、そういった施設では家族のサポートがない限り、先述した通り最低限のケアしか受けることができず、一日の大半を一人で過ごすことになる。果たしてそれで国は障害者を保護しているといえるのだろうか。このことには、介護施設などにおける人手不足の問題も絡んでくる。この人手不足の解決策として打ち出されているのが外国人労働者だ。自国で介護の研修、専用の日本語の授業を受講し、それらの講義料や渡航料の支払いなど、仲介業者を通して行われる。彼らは仕事に熱心で素晴らしい人材であることには間違いない。しかし、我々日本人が同じ日本人のために働くことを避けている現状の打開には全く繋がらない。このことはいずれ家族内でも起こってしまうだろう。障害者に限らず、老いた父母の世話などを遠ざけるようになり、施設の利用者数は増え、その需要の増加に施設の増設、人員の確保が間に合わず、外国人労働者がまた増える。(現に介護施設、定員共に増加している) 就活難と言われるこの時代、日本の若者は身近な人々の生活にも眼を向けるべきではないか。そこには私達を必要としている人々がたくさんいる。

ネット通販の浸透について

近年、新たなショッピングの形態として広く定着しつつあるのが **amazon** や楽天市場といったインターネットを利用した通販サイトだ。

通販サイトが近年、利用者・売上額を大きく伸ばしている主な理由は家に居ながらにして欲しいものを手に入れられる気軽さもさることながら、やはりその価格の安さ、在庫のバラエティの豊富さ、という二つが主ではないかと私は思う。実際私の周りの友人も大学での学習に必要な文献をインターネットの通販サイトを通じて手に入れることが多いらしい。大学での学習に必要な専門書は一般の書店で探すことが難しく、また価格もほかの書籍に比べて高価なことが多いため、通販サイトはそれらを手に入れるのにうってつけなのだという。

しかし近年通販サイトに関する問題として挙げられているのがその利便性や価格設定がそれ以外の他の業者や個人経営の店舗の顧客を奪い、経営に打撃を与えているという点だ。実際、フランスでは個人書店の経営を守るため **amazon** での取引に課税を行う、という法案が提出された例もある。

しかし、私はこの他の業者に対しての通販サイトの台頭は仕方のない事であるし、それに対して当の業者や店舗以外が介入することが良い事とは言い切れないと思う。商店街の個人商店がロードサイド型のショッピングモールの台頭で廃れてしまったように、個人書店を大量仕入れのチェーン書店が潰してしまったように、ただ顧客のニーズによって必要とされるものが生き残っただけに過ぎない。重要なことは現在顧客を奪われている個人の店舗や業者が、通販サイトになくて自分たちにある強みを自身で理解し、新しい経営方針を打ち出すことだと思う。

そのようにすることで、顧客にとってもショッピングの際の選択肢が広がり、市場にも活気が生まれるのではないかと感じた。

△ 「現代のビジネスパーソンの人生観について」

私は最近、今日ビジネスの世界で活躍している人の本を読んだり発言を聞いたりすると、多くの人物がある共通の人生に対する考え方を抱いていることに気づいた。そしてこれは現代社会を考える上で非常に重要な現象なのではないかと感じたので、これについて論じてみたいと思う。

まずはいくつか実例を挙げるところから入りたい。例えば、AmazonのCEOであるジェフ・ベゾス氏はプリンストン大学での卒業式の講演で以下のようなことを話している。「80歳になったあなたが、あなたの過去を振り返るとしましょう。その時に一番心に残っていること、思い出すことはあなたが下してきた決断の数々であると私は信じています。(※1)」あるいはwantedlyの代表であり、ベンチャー企業界のスターである仲暁子さんは対談で以下のように語っている。「わたしは、人生は有限だという思いがすごく強いんです。今やらなければ、あっという間に終わってしまう。だから、常に切羽詰まっていますね。(※2)」他方でこのときの対談相手であり、同じくベンチャー企業界のスターである岩瀬大輔さんも次のように返している。「あるとき気付いたんです。人生は、大陸を鉄道で横断する旅のようなものではないかと。目的地に早く着きたいなら、飛行機に乗ればいい。でも旅の目的は、早く到着することではなくて、車窓の風景だったり、たまたま乗り合わせた人との他愛のない会話だったり、“今”している移動そのものを楽しむことですよね。人生の目的も同じで、道のりそのものだと思うんです。思いがけない出会いも、トラブルやアクシデントも、全部ひっくるめて楽しむこと。仕事だつてうまくいかないこともたくさんあるけれど、それも自分の糧になる。やりたいことをやって、すべてのプロセスを楽しむようになって、今は、いつ死んでも悔いはないという気持ちがあります。(※2)」

ここで挙げた例はあくまで氷山の一角であり、最近のビジネスパーソン、もっと広くいえば何かの分野で活躍している人の発言を聞いていると、かなりの割合でこのようなニュアンスの言葉が共通して含まれていると感じるのである。もちろん人によって表現の方法は様々で、「死ぬときに後悔しないように」とか「死から逆算して」とか「いつ死んでもいいように」とか、他にも様々なバリエーションがある。とにかく今日何らかの分野で第一線で活躍している人の本当に多くが似たような人生観を語っているので、皆さんもきっと心当たりがあるのではないと思う。こうした考え方をまとめると要するに、「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたいという感覚ないしは価値観」ということで括ることができるのではないと思う。そして、私個人の感覚としては、今日の第一線で活躍している人の多くが揃いも揃ってこういった感覚・価値観を持っているというのは、現代社会を考える上で非常に重要な現象なのではないか感じている。従って、以下ではこのような感覚の正体について考えてみたい。

本論に入る前に取っ掛かりとして、こうした人生観に対して真っ先に浮かぶ反論でかつ冷静なものの一つを考えてみたい。それは、そもそも自分の人生を振り返っている余裕があるような安らかな死を迎えることができるかどうかなんて運次第なので分からないということである。例えば交通事故や自然災害などで気づく間もなく死んでしまうということも考えられるし、そうでなくても急に意識を失ってそのまま死んでしまうというケースも多い。また、癌にかかった場合は未

期になれば、苦しくて自分の人生を振り返っているところではないかもしれない。

これは主張自体はもちろん正しいのだが、同時にどこかしっくりこないというか、本質的な批判ではないとも感じられるはずである。そこでこれからは、このような「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたい」という価値観の分析に入りたい。

第一に私はこうした価値観はロマン主義的な感受性の一つの表れなのではないかと考えている。私はロマン主義の専門的な議論に明るくないので、ロマン主義とは「ここではない理想的などこか」を希求する態度であると大雑把に考えている。「ここではない理想的などこか」の対象は入れ替え可能なので、その時々によって「古代」、「自由」、「社会主義」、「民族」等と好きに置き換えられる。従って、当然そこに「死ぬとき」を置くことも可能である。だから、「死ぬときに振り返って」という場合の「死ぬとき」とは、例えば80歳だとか、余命を宣告された後だとかの具体的かつ現実的な時間軸上のある地点を指しているのではなく、むしろ抽象的なものであり、ロマン主義的な「ここではないどこか」の一つの現れである解釈の方が妥当なのではないかと思う。

ただ、そこでさらにもう一步ふみこんでみたい。今日のロマン主義の対象として、とりわけ「死ぬとき」というものが選ばれる理由はなんだろうか。

私はここで社会学者の大澤真幸さんの資本主義に関する議論を参考にしつつ(※3)、資本主義的なものの考え方が人生観にも投影されているのではないかと仮説を立ててみたい。資本主義において最も重要な要素の一つが「投資」である。投資とは、大澤さんの定義によると「現在の快樂の享受を留保して、それを未来へと先送りすること」である。ただ、ここでの「未来」とは終わりのないものである。従って、資本主義のプレイヤーは、未来に回収する利益を最大化するために投資をするということを半永久的に反復し続けることになる。これが大澤さんが主張する資本主義の基本的なメカニズムである。そして彼はここでさらに重要な指摘を追加する。「投資」というのは快樂の先延ばしなので、本来であれば苦難を伴う行為である。だから資本主義のプレイヤーは将来の利益の回収というモチベーションがあるから投資をする際に伴う苦しみを甘受するというのが本来のはずである。しかし、彼によると投資-回収を反復している内に投資という行為そのものがある種の快樂になるというのである。身近な例で考えると、例えば受験勉強を考えたときに最初は志望校に合格するために遊びを我慢して勉強することになると思うが、次第に受験勉強そのものにある種の喜びを感じるようになるという感覚は経験したことがある人も多いのではないかと思う。

このような図式をより大きな枠組みである「人生」に当てはめると、「死ぬとき」において振り返ったときの「人生の充実度(密度)」を最大化するために、今は苦しい体験をできるだけたくさんするのが「正しい」ということになる。それに加えて重要なのがそうして苦しい体験を積んでいるうちに、苦しい体験そのものがある種の喜びになっていくということである。ここで冒頭で引用した岩瀬大輔さんの発言を振り返ってみると、この議論に通じるものを感じるのではないだろうか。

もちろんこれだけだとやや突飛な議論に聞こえてしまうかもしれないが、例えば中世の西欧に

において、商人的な考え方の影響を受けてカトリックの世界観に「煉獄」というものが追加されたように、経済活動におけるものの考え方がより大きな枠組みである人生観にも影響を与えている面は決して少なくないと私は考えている。

ここまでの結論としては、「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたい」というときに彼らの語る「死ぬとき」とは個別具体的な人生のある地点ではなく、ロマン主義的な憧れの対象としてのより抽象的な「死ぬとき」なのである。そして、彼らのそうした人生観は単にロマン主義的なだけでなく、そこには資本主義的なものの考え方が投影されているのではないかと考えられる。

では、第一線で活躍しているビジネスパーソンの多くがこうした価値観の下に生きているのは果たして社会的に良いことなのだろうか。そのことについても少し考えてみたい。

まず、大前提として改めて確認しておきたいのは、「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたい」的な人生観は資本主義社会とは極めて相性がよいということである。こうした価値観の下に生きている人間は、死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるように、普段から人一倍努力するし、新しいことにもどんどんチャレンジするだろう。また、彼らが見据えているのは「死ぬとき」なので、ちょっとビジネスで成功したとかちょっと金持ちになった程度では満足することがない。それはあくまで仮の目標を達成したにすぎないからである。その場合、彼らはすぐに次の目標を設定して、またそれに向けて努力し続けるだろう。

故にこうした価値観を持つ人物は資本主義社会におけるプレイヤーとしては非常に優秀なので、企業もそういう人物を採用、及び育成したいと思うはずである。特に、本論でも 3 人の例を上げたように、大企業やクリエイティブな企業の上層部にはそういった価値観の人間が多いと推測されるので、尚更である。

従って、資本主義社会と相性が良いこのような価値観に基づく生き方は社会全体を通じてますます「かっこいい生き方」として奨励されるようになっていくのではないかと思う。もちろんこれは必ずしも悪いことではない、例えば今日の我々が普通に iPhone を使ったり、逐一外出しなくても Amazon で簡単に買い物できたりするのは、Apple や Amazon の社員の方々が情熱的に仕事に打ち込んでくれているおかげである。そして、これからも新しい技術やサービスを生み出して世の中を発展させていくのはこういった人々なのだと思う。だから、一部のビジネスエリート達が自発的に「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたい」的な人生観を抱くようになり、情熱的に仕事に打ち込むようになるのは何の問題もないし、むしろ社会のことを考えればそれは歓迎されるべきである。

ただ、他方であまりにも社会全体でそうした価値観が力を持ちすぎると、ささやかな日常の繰り返しに幸せを感じて生きている人の居場所が少しづつ失われていってしまうのではないかと危惧している。具体的には、メディアに登場する人物や巷で売られている自己啓発本がそろって「そんな刺激のないつまらない人生送っていいのか、死ぬときに後悔しないのか？」的な言説ばかりを展開するようになったり、学校や会社において周囲の人々みんながそういった「充

実した人生」的な価値観に染まっていたりすると、「ささやかな日常の繰り返しに幸せを感じて生きている人」があたかも自分の生き方が否定されているような感覚に陥って不安を募らせてしまうのではないだろうか。そうなってしまうと事実上の価値観の抑圧に近いことが起きてしまう。

また、「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたい」的な生き方は強靱なタフネスを必要とするので、本来は万人に勧められるものではないはずである。ところが社会の煽りを受けて本来であれば「ささやかな日常の繰り返しに幸せを感じる」タイプの人間までもがそうした生き方に駆り出されるようになると、過酷さに耐えられずに不幸になる人が量産されるのではないかとも感じている。

従って、やはり私としては「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたい」的な人生とは別にもっと緩い人生も選択肢として引け目を感じずに選べるような社会であってほしいと思っている。

ただ、「ささやかな日常の繰り返しに幸せを感じる」的な感受性は「死ぬときに振り返って充実した人生だったと思えるような生き方をしたい」というような人生観とは対照的に、資本主義とはあまり相性がよくないので、現実的には厳しい闘いになるのかなという感じもしている。加えて、ビジネスの世界で活躍している人はやはりどうしても人間的に魅力的で、話し方も説得力があったりするるので、そういう人達がメディアに出てきて「人生は刺激があって充実してたほうがいいじゃん。刺激がないルーティーンな人生なんてつまらないでしょ。」的な語りをするので、ささやかな日常の繰り返しに幸せを感じるような感受性に基づく生き方が、有限な人生を怠惰に消費しているもったいない生き方であるかのようなネガティブな印象をどうしても持たれてしまうという構造的な問題もあるのではないかと感じている。

いずれにしても、ストイックな生き方もゆるい生き方も両方が尊重される社会が良い社会だと思うので、そういう社会の可能性を絶えずどこかで考えていく必要があるのだと思う。個人的には、例えばマンガ作品の中には、そういった「ゆるい生き方」の良さみたいなものが肯定的に描かれている作品でかつ優れたものが多いという印象があるので、そういったところから新しい価値観が出てこないかなと少し期待している。

※1

<http://logmi.jp/6726>

※2

<http://womantype.jp/mag/archives/10349>

※3

大澤真幸

『「正義」を考える 生きづらさと向き合う社会学』

NHK 出版新書

第三章

言いたいことわかるし、なるほどと思わされるが、もっと独自の概念やハッとさせる事例がほし
い

○クールジャパンといけばなについて

最近、「クールジャパン」と銘打ち、日本文化を海外へ発信する官民を挙げた動きが活発となっている。海外でのイベント開催や市場開拓のための投資を行うことにより、日本文化やライフスタイルを売り込もう、というのである。例えば、アニメ・漫画といったコンテンツ分野、日本食、ファッション等が対象とされており、海外での普及・定着を目標として様々な施策が行われている。

しかし、いけばなを始めとする「伝統文化」が既に海外進出を行い、各地に定着していることは、それほど知られていない。現在、いけばなの三大流派である、池坊、小原流、草月は、それぞれ海外に数十の支部を持ち、草月のように国内よりも海外支部の方が多い（国内49支部、海外120支部）という流派もある。また、いけばなの国際的団体、いけばなインターナショナルは50年以上の歴史があり、世界各地に163支部が展開している。

私は草月のいけばなを学んでいる。昨年、イギリスへ行き、ロンドン支部の元支部長を訪ねた。「近年のフラワーアレンジメントは、いけばなの影響なしには語れない」という話を伺ったが、いけばなが海外に深く定着していることを私は実感した。

いけばなの海外進出には特徴がある。それは、誤解や曲解を受けず、国内同様に伝統が継承されながら広まり、定着していることである。

それでは、どうしていけばなは、海外進出に成功したのだろうか。

それは、「門弟組織」と「テキスト化」の二つの要因があると考えられる。

門弟組織とは、家元をトップにしたピラミッド型の組織であり、いけばなの伝統の継承と発展を担う共同体である。門弟組織は、一対一の師弟関係に比べ、より多くの人々が伝統を学ぶことができる。室町時代に成立した「立花」を源流に持ついけばなは、江戸時代後期に大きな流行を見せた。その際、門弟組織が整備されたことで、池坊の門弟数は数万人に達した、と言われている。海外進出の際も、日本と全く同じ伝授形態がとられた。

テキスト化とは、学ぶべきことがら、順序があらかじめ決められており、それがはっきり明文化されている、ということである。草月では「花形法」「五十則」がそれにあたり、日英対訳の教科書が全世界で使用されている。

いけばなに限らず、茶道や盆栽も海外で定着していると言われており、これらにもまた、海外進出が成功した要因があると思われる。これらいけばなをはじめとする、伝統文化の事例と成功要因を研究、応用していくことにより、クールジャパンを成功へと導く鍵が見つかるのではないだろうか。（1062字）

伝播したカラクリが見えて面白い。やっている中の人にはふつうのコトでも外からみると意外

△就活について

大学 3 年生も半ばに入り、いよいよ就職活動を視野に入れて大学生活を過ごし始めるようになった。確か、私たち 2016 年卒業の年代から就職活動の仕組みが変わる（企業の採用活動の解禁を数か月遅くする）ということで、以前よりも増して企業の新卒採用や、就活生の就活に対する意識が高まっているのを体感している。これはメディアでも、私たち学生の中でもかなり話題になっている。しかし、蓋を開けるとこの採用活動の解禁を遅くするというのは、経団連の一方針で、それに賛同する企業のみその方針に従うということになっているらしい。しかもその数は日本にある全企業の 1 割に過ぎないという。思ったよりも、かなり世間で騒がれていた割にはずっと割合が低い。ただ、経団連の方針に賛同している企業の圧倒的多数はいわゆる「大手企業」であり、私たちが就職活動を始めて真っ先にエントリーするであろう企業ばかりである。そういう企業が採用活動の後ろ倒しにより、優秀な人材を確保するのにかかる時間がより減ってしまったということで、水面下で優秀な人材の確保に乗り出した。いわゆる「インターンシップ」の開催である。多くの企業はインターンシップによって優秀な人材を見つけることに熱心になっている。インターンシップにて優秀なパフォーマンスができると、内定にかなり近づく。大手企業に人材を取られないようにあれこれ思考をめぐらしている準大手や中小企業もこれに釣られるようにこぞってインターンシップを開催しているようになった。就活サイトを見ていると、どこもかしこもインターンシップの開催のお知らせばかりである。就活セミナーの講師や就活を終えた 2015 年卒業の先輩方は昨年度の同時期に比べてインターンシップの数も倍近くに増えていて、今年度の就活生も就活に真剣になり、インターンシップにかなりの労力をかけている学生が少なくないのを実感しているという。そういう私も、サマーインターンシップに 10 社応募し、4 社のインターンシップに参加することになっている。10 社の内訳は誰もが知っている超大手企業、外資もあれば、無名のベンチャー企業もある。私はそれなりにインターンシップに参加しようとしていた方だが、同じ境遇の友人や、知り合い、セミナーやイベントで会った人々と話すと、彼らも同じように多くの数のインターンシップに申し込んでいるという。ふと、なぜだろうかと理由を聞きたくなった。そうすると不思議に、「なんとなく参加したほうがいいと思った」のが私含め全員に共通している考え方であった。就職活動の開始が遅くなって、あらゆる就活サイトや学生向けの就活セミナーやイベントでは、言い方に強弱はあるがどこも、インターンシップに受からないと内定はないなどと言っている。企業もたった 1 日のインターンシップに二次選考、三次選考、適性試験などを課してまるで本当の新卒選考のような状況を醸し出している。あらゆる発信媒体が就活解禁が遅くなった分、自分の能力を磨かなければいけないなどと煽り立てている。就職まで自分の能力を磨いておくのは至極まっとうな言い分である。ただ、もちろん例外はあるだろうが、当の私たちは、インターンシップになぜ参加するかというと、就活の仕組みが変わるなど、何よりも漠然とした不安があるからこぞってインターンシップに参加しているだけで、今まででは「職場体験」の要素が強かったはずのインターンシップが「選考活動」になってしまった。それに漏れてしまった就活生は「インターンに落ちるようでは内定はないのではないか」と不安のどん底に落とされるわけである。漠然と就活に対する不安を抱えている就活生、

特に目を付けていた企業のインターンに落ちてしまった就活生一要するに全就活生が就活に「異常に」怯えているのが現状である。それをさらに煽るように、入塾に数十万する就活塾や、元人事を名乗るサラリーマンが指導するというこれも入会に数万～十数万、月謝数万円の就活指導が大いに流行りだした。これに走る就活生も少なからずいる。Twitter や Facebook の就活アカウントをフォローすると胡散臭い元人事が腐るほどいて、彼らのほとんどは「就活の極意はインターンとエピソードづくりだ！」などとたまっている。その極意を突き詰めていくと、どこもかしこも同じようなことしか言わない。さらに、インターンブームに便乗して人手不足の会社がどこからどうみても明らかな「無償労働」を平気で「インターンシップ」と騙り、学生を釣っている始末である。1日数十件の電話をかけたり、飛び込み営業をやらせたり、業務補助という名の雑用係に学生を充て、その募集条件が交通費・報酬なし、1件契約を取るごとに〇円、圧倒的成長！などと謳っていて、なかなか噴飯ものだなあといった感じである。大体就活に不安のある就活生は、そういう「(自称) インターンシップ」に走ったり、企業にアピールするべく、自分磨きのエピソードを作ることに走る。代表的なのが、「どこかのサークルや部活の代表」、「ボランティア」、「語学」、「海外留学・旅行」、「アルバイトで数字を上げること」に走る。インターンシップの選考の一環でグループディスカッションや集団面接をやっていると、グループ全員がサークルの代表だったりする。就職活動サイトでそれなりに目立つ就活生の自己紹介を見ていると、ほぼ全員が上記のエピソードを持っている。大体の就活生に学生時代頑張ったことは何かと聞くと、「代表/部長としてまとまらない(成果が出せない)サークル/部の改革に乗り出して成果を上げた」だの、「アルバイトで売り上げが悪かった店舗の売り上げを伸ばすために自分が頑張った」だの、「インターンシップに参加して優秀な成績を上げた」とのたまう就活生がかなりの数いるのではないかと。みんな同じような人間になってしまっている。こういうエピソードが悪いと言いたいわけでは全くないが、みんながみんなそろい揃ってこういうことをするのが就活成功の近道と思いついてるのは如何なものかと思える。企業もこういう人材を好んでいたが、就活の仕組み改革を機にこういう学生が増えすぎて辟易し始めているのではないかと。結果的に、学業に打ち込んでほしいから就活を後ろ倒しにしたが、その反動でインターンシップなるものが大いに広まり、かつて想像もできなかったような過熱様相を帯びてきた。今までの学生は「本選考対策」に費やしてきたものを、「サマーインターン対策」、「ウィンタージョブ(インターン)対策」、「本選考対策」という三重苦を背負わされている。学生の本分は学業であるはずだ。しかし、インターンシップやらアピールのためのボランティア活動やら何やらで、「就活のための大学生活」を送ることを強いられている。もちろんこういうテンプレートみたいなエピソードづくりに励まなくても就活に成功している就活生はたくさんいる。腐るほどいる。ただ、上記のようなテンプレートの学生生活を送ってアピールしている就活生はもっともっと腐るほどいる。本末転倒な気がする。どんな莫迦なことであれ自分がやりたいことをとことん突き詰めて、笑って、泣いて、苦しんで、悩むのが最初で最後の「自由な」生活が送れる大学生活の醍醐味ではなからうか。折角の大学生活を就活のために縛られるのが惜しくて仕方がない。

—「就活」って、何だろう？

人種差別について

colored seats や segregation が撤廃され、公民権運動がもたらされ、黒人の「社会的平等」が確保されて、早半世紀が経とうとしているが、私たちは黒人差別が無くなったと胸を張って言うことは決してできないだろう。このコラムにおいて、私は根強い黒人差別とその原因について考察したい。

差別感情はどこから生まれてくるのであろうか。ファーガソン州の事件のニュースを見ていると白人の黒人に対する差別は根強いし、何らかの原因があると私は考える。黒人はしばしば貧困や犯罪と結びつけられることがある。実際に、アメリカでは、黒人による犯罪率は白人のそれより高い。このような白人の危機意識が差別感情に結びついていると言えるかもしれない。また、社会的階級が全体的に低いことも原因の一つであるかもしれない。オバマ大統領などの例外もあるが、未だ政府要職は白人に半数以上占められている。しかし、このような構造は黒人によって作り出されたものではない。彼らは白人に虐げられて、教育や賃金の観点で不利な位置に置かれた。このような過去の不正義を正す必要はあるだろう。しかし、一方で大学などにおける AA(アファーマティブ・アクション)も差別につながることもある。具体例あるのか？在特会のいう「特権」と同じか？黒人優遇はさらなる白人の敵意につながることも否定できないだろう。問題はどのように差別や格差を取り除くかである。社会的地位の確立が必要である一方、それを実現させる政策が更なる差別を引き起こすジレンマを孕んでいる。

自由に書いてよいということなので私はかねてから考えていた「スポーツに物語は必要か」ということについて書いていきたいと思う。個人的に、スポーツの醍醐味とは選手が日々の鍛錬の成果、身体の可能性を限りなく引き出したプレー、あるいは演技にあり、それがプロスポーツならば尚更「結果」が重要されると思う。少なくとも、プロアマ問わず、選手側として結果にこだわらない者はいないはずだ。しかし、スポーツファン、あるいはそれを報じるメディアのなかには結果が悪かろうがよく頑張ったなど過程を美談とする風潮がある。私はプロ野球のファンだが、甲子園、高校野球はあまり好きではない。理由は上に書いてあるようなことが顕著に見て取れるからだ。例えば今年の夏の甲子園ではある高校のマネージャーが特進クラスを辞めてまでチームのために働いたという記事が取りざたされた。観衆の目は選手以上に彼女に集まり、もはや野球など二の次のような空気さえ感じられてしまった。また、これは特定の大会において、というわけではないが公立高校が勝ち進んだり、あるいは出場するだけでやたらと取り上げられることが多い。たしかに環境などが強豪私立に劣ることもあるが出場校として並列に数えるべきである。また、選手のバックグラウンド(例えば母子家庭で育ったなど)を紹介したり、明らかに野球とは関係のないところばかりメディアで報じられ本当にプレーが取り上げられるのは松井秀樹、松坂大輔、最近でいえば藤浪晋太郎など超一流の選手しかいない。裏を返せばそれ以外の選手はプレーではなく本来ならば付加価値とされる情報を第一に報じられ、またファンにとってもそれが重要であるかのような空気がある。また、試合の勝敗は二の次であり、努力の過程を重要とし、もはや敗北の瞬間、選手たちが散る瞬間を心待ちにしているかのような気味の悪い雰囲気がないとは言えないのではなかろうか。これらはメディア側の責任でもあるし、観客側の責任であると

も言える。

私はこのようなプレー以外のところに注目するスポーツ観戦の仕方は好まないし、そのような人に向けて言いたいのは、選手自身は貪欲に勝利のみにこだわっていることを蔑ろにしてはいけないということである。

フィギュアスケートについて

今年二月に行なわれたソチ五輪で羽生結弦が金メダルを獲得したことや、メダル獲得はならずとも圧倒的存在感を示した浅田真央の演技がつい最近の出来事のように思い出されるフィギュアスケート。五輪シーズンを終え、今月ついにグランプリシリーズが開幕。新たなシーズンが始まった。その初戦となるアメリカ大会が先日行なわれ、そこでは早速、今季“打倒・羽生”を掲げている町田樹が優勝を果たした。ソチ五輪で金メダルを獲得した羽生に続き、町田も今後男子フィギュア界の主軸となることは確実であろう。

今季はボーカル入りの曲の使用が認められるなどのルール変更が特に注目を集めている。しかし日本フィギュア界においては、選手のパフォーマンス以外にも目を向けるべき点が多い。

バンクーバー五輪で日本男子初のメダル獲得という偉業を残した高橋大輔は、今季休養を取っていたが今月に入って現役引退を表明。さらには同じく今季休養中でいまだ進退を明らかにしていない浅田真央の存在がある。その他にも昨季をもって現役を引退した人気選手が数名おり、完全に選手が入れ替わったという印象だ。特に浅田については、彼女一人が今までの日本フィギュア界を引っ張ってきたといっても過言ではなく、その居ない穴を埋めることは難しい。男子には羽生や町田といった新戦力が出現したが、女子は現時点で浅田に次ぐ存在となる選手がいないのが実態であろう。

しかしながら現役で活躍する選手のみならず、次の世代を生み出す役割においても大変重要な“インフラ整備”はまだまだ厳しい状況にあるようだ。

羽生はかつて地元仙台のリンクを使用していたが、震災の影響もあり、数年前から練習拠点をカナダに置いている。その他国内で練習する選手も、非常に限られた中でリンクを使用するしかない。そのためシングル部門で手一杯で、広いリンクを必要とするペアやアイスダンスといった部門の強化ができない。

この背景として当然財政難などが予想される。だが、どうもそう単純な話ではないらしい。ソチ五輪の際に日本スケート連盟が用意したアルメニアのリンクが粗悪な環境であったとの報道や、たびたび噂されるスケ連のスキャンダルが積み重なり、スケートを愛するファンからもスケ連への疑問符あるいは非難の声があがってきているのだ。

世界舞台で通用する選手を輩出し、さらにどの選手にも惜しめない拍手を送る日本の観客は海外の選手からも好評で、日本のアイスショーへの出演を快諾する外国人選手も多い。それにもかかわらず、いまだに“フィギュア大国”とは言い難い日本。日本フィギュア界の今後の動向に注目し続けたい。

△、5分で分る〇〇映画、みたいにまとめ直せばあり映画について

映画にもいろいろなものがある。コメディ、SF、アニメ、ドキュメンタリー、実験的な作品など。国内外問わずアンダーグラウンドで制作されているものなどもあって数えるとキリがなく、TSUTAYA でレンタルできる DVD を目の前にして、何を借りればいいのか途方に迷うという意見を友達からされることが多い。上質な映画を誰にも邪魔されずに見られる時間は学生の間だけだろう。その短い時間の中で、見るべき映画というものがある程度は取捨選択する必要がある。では、どのような映画を鑑賞すればよいのだろうか。

まずは国際的に高く評価されている映画を片っ端から見ていくという方法がある。いわゆる世界三大映画祭（ベルリン、ヴェネチア、カンヌ）において最高賞を受賞している作品には傑作が多く、政治的、芸術的、性的テーマなどに焦点を絞っているために直観的で問題提起型なのである（もちろん"Fahrenheit9/11"や"Cesare deve morire"のような駄作を掴ませることも多いが）。そして気に入った作品があれば、次はその作品を制作した監督の作品を見ていくとよい。

ぜひおさえておくべき監督たちは例えば以下の通りである。イタリアならフェデリコ・フェリーニ、ルキーノ・ヴィスコンティ、ミケランジェロ・アントニオーニ。フランスはジャン・リュック・ゴダール、フランソワ・トリュフォー、レオス・カラックス。ドイツはヴィム・ヴェンダース、ファズビンダー、オーストリアのミヒャエル・ハネケ。スペインのビクトール・エリセ、ギリシャのテオ・アングロプロス、ロシアならアンドレイ・タルコフスキー、アメリカならスタンリー・キューブリック、コッポラ親子。日本にも北野武や宮崎駿がいる。

まずは定番から入るのが、特にヨーロッパに多く見られる実験的映画などを後々見るための馴れに必要である。

そして、映画はやはり映画館で対価を払って観るべきものである。自宅の小さなテレビで緊張感無く観ても記憶に残りづらく、時間の無駄になる場合が多い。そもそも映画監督も巨大スクリーンで多くの観衆に観てもらおうように制作している。映画は音楽のように、時代に応じて鑑賞形態が変化していく芸術ジャンルではない。そういった意味では、映画館に行けばほぼ同じ条件で作品を楽しむことができる「映画」とは、非常に親しみやすい、大衆向けのメディア芸術なのである。都内では最新の映画を上映するシネコンから旧作を放映する老舗名画座も多数存在している。これを観に行かない手はない。

さきほど列挙した映画監督の作品は、多く観衆に問題提起をしているものばかりである。思想家アドルノがシェーンベルクを評価したのは、彼の音楽が聴衆に「単なる静観をではなく、実践」を要求するものだから、であった。映画においても似たようなことが言えそうである。つまりいい映画とは観衆に「見せる」のではなく「問いを投げかける」のである。ハリウッド映画の大半は次から次へと場面が切り替わり、情報量でスクリーンを盛り上げようとする。対していい映画は「余白」をうまく入れている。それは例えばヨーロッパ、ロシア映画の長回しであったり、キューブリックに見られる独特のクローズ・アップであり、宮崎駿や北野武の自然描写である。こういったシーンが入ると、観衆は呼吸が落ち着き（または突然の「異化」に落ち着かなくなり）、そのカットをもとにより自発的に鑑賞するようになる。

映画の良い例と悪い例を一人の映画監督を引用して説明してみよう。マイケル・ムーア監督はアメリカ社会を風刺した作品で有名であり、アニメーションを駆使した映像やブラックコメディ調のあからさまな編集、そしてテンポの早さなどが人気である。溢れ出る情報量とスピード感は、観衆に考える余地を与えることがない。これは成功すれば立派なドキュメンタリーになり、もし失敗すればナチズムのプロパガンダ映画に墮する。前者の例は"**Bowling for Columbine**" (2002)である。この作品はマイケル・ムーア監督が以前から向き合っていたアメリカの銃規制問題をロンバイン高校銃乱射事件(1999年4月20日)をきっかけに制作したものである。なぜアメリカは銃社会化したのか、強い規制にも関わらず銃殺事件が減らないのか。メディアの煽動性や国民の過剰なセキュリティー意識をえぐり出し、国民ひとりひとりに問いかける構成をとっている。この作品の問題意識は、特に先進国に住む人々にとっては欠かせないものだ。

対して後者、悪い映画の例は"**Fahrenheit 9/11**"(2004)である(ちなみにこの作品は2004年のカンヌ国際映画祭において最高賞のパルム・ドールに輝いてしまった)。この映画の概要は、アメリカ同時多発テロ事件(2001年9月11日)に至るまでイスラム圏を利用、蹂躪した事実、さらにテロ直後の対応の遅さなどをすべてジョージ・W・ブッシュ前大統領に押し付けているドキュメンタリー、である。こういった映画は歴史的事件の原因を大統領ただ一人の問題として片付けるのみにとどまる。これを例えばイスラム国家を敵対国として映画をつくれればどうなるであろうか。戦争を煽動する宣伝映画となろう。

このように、映画芸術とは諸刃の剣となりうる。大衆を楽しませることに特化しているぶんにはいいが、徹底的に洗脳してしまうものはいい映画ではない。観るものが考え、答えに窮する作品こそ、真にいい映画と言える。(2149字)

「映画について」

大学で映画を学んでいる身であるが、映画というのは、コミュニケーションツールであると思う。もちろん、芸術のひとつの形として存在してはいるが、それは、一瞬の計算されたショットの美しさであり、映画の外見、つまりパッケージ的なもので、映画そのものが持つ本質的なものではないと思う。

映画を撮るということは観客に語ることであり、また、撮る際には、役者に、撮りたいものを理解して、再現してもらわなければならない。ここにまず、コミュニケーションが生じる。

そして、映画を観るということはその語られたものを受け取る行為である。しかし、必ずしも作り手の意図どおりに受け取る訳ではない。観客は、自分の感じたように理解する。これが第二の、最も重要なコミュニケーションである。

映画とは、理解と理解のぶつかり合いなのである。もちろん、会話にもコードがあるように、映画にもある。それは国や環境に関わる文化的なものだったり、時代的なものだったりする。

そしてまた、人は映画を語ることで、コミュニケーションをとる。あの映画のどこにどんな風に感動したかを語り合い、共有する。これが第3のコミュニケーションだ。

以上の3つの、どれか一つしか体験しない人も三つとも体験する人もいるだろう。しかし映画

によって、人は自分一人では体験し得なかったもの、また、遠い昔や今現在経験していることを鮮明に体験し、悦に浸る。この感動を共有したいから人は映画を共に作り、共に観て、共に語り合うのではないだろうか。

舞台にはときどき、神がおりてくる。このケースにおいて、舞台とは演出と観客の集中力の渦巻く特殊な場であり、中心に立つ演者には相当な量の意識が集中している。神事としての芸能でよく見られる構造だ。その結果、限界まで高まった高揚感から、神がかりといわれるようなトランス状態が発生する。

古くから続く式三番という芸能に、三番三（三番叟）というものがある。演者が神に扮して、五穀豊穡を寿いで舞うもので、現在は能楽に取り込まれて演じられることが多く、狂言師が演者を務めている。彼らにとっての三番三は被キといって、演者の芸歴の節目されるほど重要なレパートリーであるため、様々な思い入れがあるようだ。

能楽の演技は型によって構成されている。身体動作を抽象的な身体言語に置き換えて表現するのだ。この型についての考えは様々に展開されているが、この違いは三番三において高揚感の差異として現れる。和泉流狂言師野村萬斎は、型はプログラムのようなものだと例えており、正確に正確に受け継いだ型を実行するのだと語っている。三番三には囃子方がおり、彼らの拍子に合わせて舞の型を行っていくのだが、その延長線上に高揚感が現れるのだそうだ。一方で大蔵流狂言師茂山千作は、三番三を舞う時、基本は囃子と型に従うが、その進行は次第に立ち上がってきた高揚感によって、みきりで行うのだという。

これらの意識違いは三番三において、降霊儀式の手順の違いとして現れる。野村萬斎の方法では、形式をうまくこなすことによって神が降りてくるが、茂山千作の方法では演者が舞台の雰囲気うまく乗っていけるかが降霊のカギとなっているといえる。前者は儀式中心、後者は演者中心的な三番三（三番叟）だといえるだろう。

排除された韓国ブームについて

私は高校生の時から、ある韓国アイドルグループのファンで日本公演に足を運んだり、コリアンタウンと言われる新大久保で韓国料理を食べたり、大量の CD を買ったりと、かなり熱心に活動してきた。

2004 年に「冬のソナタ」を筆頭に韓国ブーム、通称韓流を巻き起こしたあの面影は、今の日本にはないと言えるだろう。2004 年から始まる韓流は、俗に第一次韓流ブームと呼ばれる、韓国ドラマを中心に多くの番組が日本でも放送された。2009 年ごろから第二次韓流ブームに切り替わり、韓国の音楽が着目され、K-POP との愛称で第一次ブームとは異なる若い世代からの人気を集めるようになる。母が第一次韓流ブームで韓国ドラマの虜になっていたということもあり、私は自然と K-POP アイドルに興味を持ち始めた次第である。

2011 年東日本大震災直後、私は母と新大久保を訪れたが、半分ほどの店舗（アイドルグッズショップ、飲食店、コスメ取扱店など）が営業をしていたが、残りの半分はシャッターが閉まっている状態だった。地震がほとんどないと言われる韓国で 出身の彼らが恐れて帰国したのも理解

できる。一部の反日感情をもつ韓国人がインターネット上のサイトに日本人は地震で死ねばいいといった趣旨の動画をアップしたことはひとつの社会的問題となった。

また、日本と韓国には未だ解決していない問題がいくつかある。領土問題と慰安婦問題だ。朴槿恵大統領になってから、彼女の父は親日派だったのにも関わらず、国民の反日感情は高まるばかりだ。

とはいえ、私の祖父母は 11 月の頭から韓国旅行へ行く。私も今年の 3 月に韓国へ行ったばかりだ。クローズアップされる韓国での反日感情だが、私たち観光客には優しく、また日本人観光客が減っているという印象をほとんど受けなかったのが事実である。

隣国を知ることで、自国をより知るきっかけになると私は信じている。

飲食チェーン店について

各種飲食チェーン店が急速にその店舗数を増やしている。東京、神奈川などの都心ではほぼ一駅ごとに店舗が設けられ、その殆どが早朝から深夜まで、時には 24 時間営業を行っている。これらの飲食店の普及によって確かに私たちの生活はある程度の恩恵を受けただろう。抛り所のない早朝や深夜に、また体調の優れない日などに、安価で気軽に食事をするができる様々なチェーン店の存在は、確かに私たちの生活に、とりわけ都心一人で暮らす人々の大きな助けとなっていることは間違いない。

しかし成長を遂げれば遂げるほど、その裏で飲食店は法に関わる大きな問題を生み出している。いわゆる「違法労働」の問題である。私のアルバイト先は某有名定食チェーン店である。今や全国に約 300 の店舗を構えるチェーン店であり、テレビの企画などでもたびたび取り上げられている店だ。老若男女問わず様々な世代が訪れることでも有名な店であるが、その実態は苦々しい。私の勤める店舗には社員が一人しかいない。すなわち店主だ。店主は今月の終わりで 150 連勤となる。150 日間毎日休まず、朝の 9 時から夜の 11 時過ぎまで土日は休憩も取らず働いている。たまにアルバイトスタッフの人数が足りており、帰れるような日でも店主は家には帰らない。他店舗にヘルプに行くのだ。店主はその労働実態を改ざんして本社に提出している。毎週 8 時間×5 日間労働をしたことにして、データを本社に送っているのだ。そんな風に提出すればもちろん労働に見合った給料はもらえない。それでもそうする理由は、深刻なスタッフ不足によりそうでもしないと営業不能に陥るからだ。店主は 40 代の生身の人間だ。今の生活を続けていたら、やがて過労で死んでしまうだろう。そこまで行かなくとも精神を病みやめていく社員も多いと聞く。それが残されたスタッフに更に過酷な労働環境をもたらす。

華々しい繁盛の裏でこのような法に触れる深刻な問題が発生している。人員確保のめどが経っていない状態で闇雲に店舗数を増やすことに意味があるのか、本当に 24 時間も営業する必要はあるのか。流れに任せて成長の歩幅を緩めることのなかった各種チェーン店はこれらの問題に直面し今大きな岐路に立たされている。

「日本におけるアイスホッケーについて」

日本でのアイスホッケー文化は野球やサッカー等と比べるとまだまだ発達しておらず、日本アイスホッケー連盟の体制の問題など、構造的に変えていく必要がある問題が多いと思われる。

最近日本でアイスホッケーについて盛り上がりがあったのは、2014 年 2 月に開催されたソチオリンピックの時であろう。アイスホッケー女子日本代表の活躍がメディアに取り上げられ、スマイルジャパンの文字がスポーツニュースや新聞でよく見られた。しかし、ソチオリンピックが閉会してからはめったにスマイルジャパンやアイスホッケーの話題が出ることはない。オリンピックで結果が出せなかったという理由もあるだろうが、日本にアイスホッケー文化が根付かない理由は様々だ。

アイスホッケーは日本ではマイナースポーツと言ってよいだろう。競技人口が少なく、リンクも練習に使える時間が限られていたり、防具買うショップが少ないなど、アイスホッケーが盛んな国と比べると環境は整っていない。

かつて日本国内だけで開催できた日本アイスホッケーリーグは相次ぐ実業団やクラブチームの廃部によって2004年に幕を閉じ、韓国、中国のチームと共同開催のアジアリーグとなった。不景気の煽りを実業団はもろに受け、その企業の方針によりチームを存続できなくなったのである。また、日本アイスホッケー連盟の体質の問題が近年話題にもなった。ソチオリンピックを目前にした2013年、会長選出にあたって、連盟役員が二分される騒動が起きた。オリンピックに向けて連盟、選手にとって大事な時期の御家騒動によりオリンピックへの不安が問題となった。

このように様々な問題があるものの、マイナースポーツであるからこそその利点もある。競技人口が少ないので、実際アイスホッケーの世界に入ってみると国内トップの選手と一緒にプレーできる機会があったり、すぐに人と繋がる事ができる。日本ではマイナーではあるがアイスホッケーが国技となっている国もあるように世界では盛んなスポーツである。日本でも構造的な問題に取り組みつつ、現役プレーヤー達が活躍することによって日本のアイスホッケーシーンが盛り上がることを期待する。

近年の出版、特に小説分野について

十年くらい前までは多く見られた「若者の活字離れ！」というような見出しを、ここ最近では見かけなくなったように感じる。しかし、かといって出版業界の業績が上向きになったわけではない。むしろ Kindle などの電子書籍媒体の進歩から考えると、これからも減衰していくことは想像に難くない。「活字離れ」があまり叫ばれなくなったにも関わらず、出版業界としては売り上げが右肩下がりであるという現状はいったい何を示しているのだろうか。

この状況を生み出している要因は、出版業界の売り上げにおける分類変化にある。つまり、「文庫」や「コミック」などの売り上げがしめる割合は相対的に増えているにもかかわらず、「雑誌」の売り上げが著しく落ちているということである。2014年の文庫の売り上げの動向を見ると、百田直樹・湊かなえ・池井戸潤などのメディアミックスによって安定した売り上げを出している作家の作品や、「ソードアートオンライン」「カゲロウデイズ」といったいわゆるライトノベル作品が売り上げを伸ばしている。しかし、その中で注目したいのは「ビブリア古書堂の事件手帖」や「珈琲店タレーランの事件簿」、「神様のカルテ」といった、「表紙にイラストを用いているが、内容にはほとんど挿絵を含まない」、「半ライトノベル」とでもいべき文庫がかなり上位に食い込んでいることである。このことは、一般的な文芸作品を読む体力はないが、いわゆる「ラノベ」を読むことには抵抗がある、という層が若者に多く存在することを示しているのではないだろうか。こうした層の存在に出版業界が気づきアプローチをかけて行った結果、こうした文庫の売り上げはある程度まで伸びていると言える。直近では新潮社から出された新たなレーベル、「新潮文庫 NEX」がまさしくそうした層を狙っているようにも思われる。

しかしこうした層が若者に多く存在するということは、「雑誌」の売り上げが大幅に落ちる原因にもなる。こうした若者は根本的には活字を読む体力がそこまであるわけではない。さらにいえば、ある程度の情報はインターネット上から引き出せるということ、身を以て実感している世代であろう。こうした層は、雑誌（文芸誌だけでなく情報誌も）から急速に離れていっているだろう。

安定した売り上げをもつ作家がいるとしても、小説などの単行本の売り上げはやはりどうしても予測不可能なところが多い。また作家という個人に依存している部分が強く、安定しない。出版社としては定期刊行される雑誌の売り上げが伸びないということは、その土台を揺らされていることに他ならない。このことが「活字離れ」という主張が下火になっているにもかかわらず、出版業界の業績が回復していないという一見矛盾した状態を生み出しているのではないだろうか。

セクシャルマイノリティーについて

LGBT と呼ばれる方々をご存知だろうか。L はレズビアン、G はゲイ、B はバイセクシュアル、T はトランスジェンダー、の意味で、性的少数者を指した名称である。近年、おねえ系タレントとして LGBT の芸能人がスポットを当てられ始めたが、LGBT というのは長い間、存在自体に目を向けられてこなかった。しかもその注目のされ方は、嘲笑の対象としてのお姉キャラである。大学などの高等教育機関において、LGBT やセクシュアリ

ティに関する授業が行われ始め、LGBTについて「名前は耳にしたことがある」や「授業で取り扱った」という学校が増えてきた。しかし、高校以下の教育機関では取り扱われないだけでなく、完全にLGBTへの配慮に欠けた教材すら存在する。そこで、未開の地である中学校・高校でLGBTの実践授業を行うことができないかと考え、実践授業を依頼した。ところが、学校側からの返事は「NO」であった。理由は様々あったが、やはり「性」というデリケートな問題を扱うため出張授業では実践者と受講者の信頼関係が築けてない上での授業になり危険であるから、というものだった。中高の多感な時期であるからこそ、自分や他人の性の多様性について学ぶことで、マイノリティーを受容することを学んでほしい。日本の性教育はまだ不足している。デリケートな問題であるからこそ、悩んでいる子を放置してはいけないのであって、この放置行為はマイノリティーへの排除ではないだろうか。

「フリーマーケットについて」

先日、都内の美術大学の学園祭の一環として行われていたフリーマーケットに足を運んだ。着なくなった服のほかにも、自分でデザインしたポストカードやアクセサリーが100円からという手ごろな値段で売られていた。自分でも簡単に作れるものを知りながらも、その手軽さからたくさん購入してしまった。

「自分の持っていたもの・作ったものを売ってお金を得る」というフリーマーケット的なシステムを通じて服飾品をやり取りする機会が増えている。代々木公園をはじめとしたいわゆる「フリーマーケット」もより頻繁に開催されるようになった。ネットオークションも浸透しているし、ブック・オフの服飾品版である「モード・オフ」など、顧客から直接買い取った服飾品を販売する店舗もより見かけるようになった。

環境保護が叫ばれる現代、フリーマーケットはその価値観に合致している。ごみの削減につながり、また「古いものを大切にする」精神を育てる。しかし、フリーマーケットの流行の背景はそれだけではないように思われる。

1つには、過剰な消費意欲がある。広告やメディア、近年ではSNSの影響で、人々の欲望は駆り立てられている。一方で、近年の不景気もあり、消費に費やせる金額というのはそこまで多くない。この現状に適合したのがファストファッションであり、そしてフリーマーケットである。自分のものを売ることと利益を得、その利益で新しいものを買う。同じフリーマーケットで買うなら、新品の既製品を買うよりずっと手ごろだ。いらなければまた売ればいい。こうして消費のループができていくのである。

もう1つには、自分のセンスに対する承認欲求の伸長があげられる。SNS、インターネット、ひいてはデジタルカメラやプリンターの家電化は、「普通の人が表現者になる」チャンスをどんどん拡大してきた。また、血縁・地縁の希薄化やSNSにおける「いいね！」機能は、見知らぬ人からの承認に対する欲求を生み出した。フリーマーケットは、自分の使っていたもの・作ったもの、「表現者としての自分」に対して、立ち寄る人に「いいね！」してもらう場になっているのではないだろうか。

欧米諸国では、その「アンティーク」「ヴィンテージ」「ローカル」「オリジナル」な精神性も含めて立派な文化となっているフリーマーケット。日本でも一過性の流行や消費・承認のためのツールはなく、真に暮らしを助けるものとして根付くことが望まれる。でもやっぱり、かわいくて安いって最強なんだよなあ。

毎年騒がれる、日本でのノーベル文学賞。村上春樹ファンのいわゆる、「ハルキスト」たちは、発表の前後騒ぎ出す。勝手に基準として語られる文学賞に意味を見出すことは別にして、文学とは何か。この一点を考えよう。最近の書店を見ると、「文学」と呼べるものはめっきり減った。シナリオ優先、話しあり気の小説は文学足りうるかと言えば、答えはノーだ。ここでよく語られるテキスト論を出すこともできるが、また違った視点から語るとするならば、文学作品と呼べるものに内容はないのか、という問題だ。確かに、目を引くような犯罪事件も起きなければ、ファンタジー丸出しの御伽噺もない。あるのは現実に近いフィクションだ。では、それは内容が薄いといえるか。きっと言えない。我々はときに、フィクションを越えるノンフィクションにでくわす。現実が小説よりも奇なり。そのような現実が、日々目の前を通過し、目にふれ、隠れ生活していることは疑いがない。特に、この情報社会で、日本文学が隆盛を究めた明治、大正、昭和前期よりも個人に物事が飛び込んでくる時代になった。だからこそ、スケールの大きな事件を求める読者が増えたとも考えられるが、個人が生きる世界の大きさが変わったかといえばきっとそうではないだろう。個人の生きるその空間が世界になる。家族、友人、その他大勢で作られるところからはみ出した「世界的な」事件を求めるだろう。その刺激を与えられる点

で、小説はすばらしい。だが、文学に成り上がるまでには、自分の生きている世界に起きる中での衝撃を与えられるものが文学の定義。村上春樹も近所の少女を書けば一人前か。

私は 2020 年東京オリンピック開催に反対だ。理由はある「気味悪さ」だ。

それは、「東日本大震災からの復興」を招致の大義名分として掲げていた「気味悪さ」だ。そのことがなぜ「気味が悪い」のかというと、招致前はさんざん「復興した日本を世界に見せる」を声高に叫び、プレゼンでは被災地・気仙沼出身の選手にスピーチさせたわりには、現在東京オリンピックと被災地復興をどのように結びつけるのか、具体的な方策は聞かれない。復興云々は招致が決まった後、完全に忘れ去られている。その上、被災地の首長の 6 割が朝日新聞によるアンケートでオリンピックが復興に「マイナスの影響を与える」と回答している。都や政府はこの事実を重く受け止め、何らかのレスポンスを返すべきある。そもそもオリンピックを「復興のシンボル」にするのに東京での開催はおかしな話であるが。

1964 年の東京オリンピックでは、第二次世界大戦からたった 19 年で東京はもうこんなに回復しているんだ、とアピールできたそう。しかし、社会や経済的なのびしろがたくさんあった昭和 30 年代と主要インフラはすでに完成した今は全く状況が違う。昔は貧富の差が大きくなり、生活は苦しくともオリンピックをみて幸せになった人は確かに多いだろう。だが平成の今は、オリンピックによるお祭り騒ぎで社会を明るくする、ということはもう求められていない。そんなお祭り騒ぎどころではなく目先の重要な危機に直面している貧困層、高齢者介護に苦しむ人々を救うことにこそ尽力を注ぐべきだ。今の「オリンピック狂想曲」はむしろ、そういった人々から目をそらすためのエサのようにすら思えてくるのだ。

尾辻克彦「父が消えた」について

前衛芸術家の赤瀬川原平が 26 日早朝に亡くなった。

超芸術トマソンや路上観察学会など、日常を異化する鋭い視線を放ってきた赤瀬川原平。亡くなってしまったことが大いに悔やまれる。

彼はまた、純文学作家としての顔も持っていた。尾辻克彦というペンネームで、昭和 56 年には「父が消えた」で芥川賞もとっている。

前衛芸術家という立場から芸術のあり方を問い直してきた反面、純文学作家として純文学に関わっている存在は、なかなか稀有ではないだろうか。

編集者から依頼されて書いたと本人は語っているが、彼の魅力は一体何なのだろう。

「父が消えた」は、要約してしまえば亡くなった父親の墓参りのために、かつての教え子と八王子に向かうだけの話である。私小説風に書かれており、現実の"赤瀬川克彦"の姿や家族模様が踏襲されているような内容だ。しかしここで展開されているのは、主人公の思考である。「見る」ことから始まる思考の内容が鮮やかなのだ。

例えば旅行が楽しいのは「普段と反対の運動をするから」であるとし、ならば「反対運動」であればそれは旅行になるのだという考えから「便所に行くのに、廊下でなく天井裏を這っていく」と発案する。芸術家赤瀬川原平の姿を彷彿とさせる視線の鋭さと思考回路である。

「見る」ことに関して言えば、主題となる父親は病に倒れ、息を引き取るときに「誰にも見られていない」。また主人公は現実の父親の生死に関わらず、日常の中から「これでもう父は死んだのだ」と判断してしまう。現実の父親の生死が曖昧にされているのだ。現にタイトルも「父が死んだ」ではなく「父が消えた」とされている。この曖昧な境界線については、主人公と教え子である馬場くんが人の一生について考える場面等にも現れているし、強引かもしれないが、純文学作家・尾辻克彦・前衛芸術家・赤瀬川原平—その正体・赤瀬川克彦という三人の間にも言える。

芥川賞を受賞した際の尾辻のコメントは以下の通り。「文章を書くのは大変気持のいいことだといつも思っている。(中略)小説を書くのはまた一段と楽しい。この楽しさは何だろうかと考えてみると、嘘をつく楽しさである。」私小説風を書くことで赤瀬川克彦の姿を垣間見せ、その思考の過程で赤瀬川原平の姿も見せたとはいきや、「嘘をつく」と言っている。この飄々とした態度が境界線を曖昧にしているように思えるのだ。

小説「父が消えた」の父のように赤瀬川克彦は消えてしまったけれども、私たち読者は電車に乗ったり便所に行ったりと、日常の様々な場面において彼の思考回路を蘇らせることができる。

「セクシュアルマイノリティについて」

本講義で「漂白される社会」に触れる中で、おのずとセクシュアルマイノリティのことに思い至った。近代的社会規範においては「あつてはならぬもの」とされるが、近年ではメディア露出の多いスター的存在になっている人物もいる。私はここにも、開沼氏のいう「漂白」をみた。

そもそも近代以前、日本の江戸時代には、性に関する規範はゆるやかなものだった。性風俗産業も幕府公認の吉原・島原をはじめ、非公認の茶屋なども珍しくなかった。その中には、マイノリティの欲求に応える場も数多く存在した。また、日本の男色文化と言えは戦国時代が有名だが、江戸時代にももちろんその名残はあった。

しかし江戸時代は終わり、日本の近代化が始まる。ここで、性に関する1度目の「漂白」が起こる。伝統的な性風俗産業は(売春島も)衰退に追い込まれ、マイノリティに至っては存在を想定すらされなくなる。自らの力ではなく、列強の圧力を受けて歪んだ近代化を迎えた日本は、当時の世界の「普通」に必死に追いつこうとした。その結果、ゆるやかな見て見ぬふりのもとで生きてきたマイノリティは、居場所を失うこととなった。

そして現在、江戸末期から実に 200 年のときを経て、セクシュアルマイノリティはタレントという形で大衆の眼前に現れた。各種メディアでおネエキャラと言われるタレントを目にしなない日はなく、マイノリティの居場所である新宿二丁目さえも、テレビで探検特集が組まれるほどだ。これは一見すると現実を直視しているようであるが、実はこの露出の増加こそが、2度目の「漂白」に他ならないのだ。

海外では同性婚が認められたりパスポートの記載に第三の性が設けられたりと、セクシュアルマイノリティ関連の動きが活発になっている。だからさすがに、見ないふりを決め込む1度目の漂白を貫くわけにはいかない。そこで編み出されたのが、「分かったふり」「理解したつもり」へ逃避する、2度目の「漂白」である。

きっとテレビを見ながら、みんな気づいているはずなのだ。「今見ているタレントだけが、セクシュアルマイノリティの全てではない」「もしかしたら自分の周りにもいるかもしれない」と。しかし、その事実に向き合うことは面倒で、場合によっては軋轢を生んだりトラブルに発展したりしかねない。最も、マイノリティに向き合うだけで軋轢が生まれそうな現代社会の土壌がまずおかしいのだが、それは一朝一夕に変わるものではない。だから、メディアで示されるようなステレオタイプなマイノリティの姿を見て、自分はきちんと現実を直視したぞ、と満足する。だがそれは、メディアが拾ってきた氷山の一角を見て、残りの部分から目を背けているだけなのだ。

つまるところ、メディアへの露出増加は、そこに目を向けさせることで、もっと広い現実への見て見ぬふりを加速させる装置でしかないのだ。これは立派に、現代社会の「漂白」と呼ぶことができるだろう。

【心の性差について】

今回私は心の性差、またそれによる弊害について述べたいと考える。

肉体的な性差とは全く違うものとして存在する、心の性差というものがある。身体の性と心の性が一致しない、セクシュアルマイノリティは LGBT と表されそれぞれの意味は L=レズビアン、G=ゲイ、B=バイセクシュアル、T=トランスジェンダーである。しかし、セクシュアルマイノリティとされる人々はこの枠に全て当てはめることはできない。人の数だけ性差があると言ってもいいかもしれない。しかし体の性が二分され、心の性も二分されることが当たり前で一般的であり正常者であるという考えが深く根付いているのは事実である。成長していく課程で矯正されていくと言ったほうが正しいかもしれない。

しかし、数多くの心の性があるという事実はここ数年で認知され少しずつ受け入れられるようになってきたが、未だ偏見が残ってしまいセクシュアルマイノリティとされる人々が堂々と公言することができる環境ではないということは事実である。

ではどうして偏見を持たれてしまうのか、受け入れられないのか。その原因として、結婚という制度が大きな弊害になっていると考える。日本では現在、同性同士が結婚することを認めていない。これは、二人が愛し合うことを公的には認めないと言っているようなものなのである。それではセクシュアルマイノリティの人々が偏見の壁を乗り越えることはできずにコソコソとしてしまうのは当然のことである。

解決方法としては、制度の改定はもちろん望みたい。しかし、署名活動をしたところで簡単に変わるようなものではない。ならば、偏見を持ってしまうような人をうまいために大衆が性差に関する知識を持つことが必要なのだ。どれだけの人が悩み苦しんでいるのかまづは知ることによって多くの人

が小さな一歩を踏み出すことでそれがいずれ大きな一歩となるはずである。

私は現在、スポーツ科学部に所属しており、日々、専門的にスポーツの事を学んでいる。専門はスポーツビジネスマーケティングという分野で、スポーツ消費者の行動を分析したり、スポーツ観戦動機などを調査し、マーケティングをおこなう。

人間にとってスポーツはどのようなものであるのだろうか。

第一に人間にとってスポーツはコミュニケーションツールである。

チームスポーツでプレイするのであれば、嫌というほどコミュニケーションを取らなければならない。なので必然的にコミュニケーションがとれる。また、スポーツを観戦するという面で見れば、現在、スポーツバーやパブリックビューイングが流行っているように、知らない不特定多数の人とも肩を組み、ハイタッチをして観戦を楽しむ。

第二に、人間にとってスポーツは気分転換になる。

嫌な気分、ストレスが溜まった時に、スポーツで発散した経験は誰にでもあるのではないだろうか。ドラマや漫画で、主人公の女性が仕事に失敗して落ち込んだり、上司に怒られてヘコンだ時は、バッティングセンターにいくことがよく見られる。

それほどストレス発散=バッティングセンターがデフォルトとなっている。

このような事例から私は、「スポーツとは、人間の身体活動を豊かにするものである」と定義したい。

身体活動を豊かにするとはなにか。

身体活動は運動ができる、体が動くだけでなく、精神の部分も非常に作用している。

身体活動のパフォーマンスを上げるには、精神のケアも必要ということである。

スポーツによって、身体を動かし汗をかければ、身体にも良い影響があるし、精神にとってもストレス発散になる。

スポーツをしてもただ疲れるだけだと反論する者もいると思う。

だが、スポーツをして適度に身体に負荷をかけることは、快眠を促進する。

不眠症患者にスポーツをさせると解消するという事例もあるみたいだ。

以上述べてきたように、スポーツは身体活動を豊かにするものであると考える。

無料通話アプリ LINE について

昨今、無料通話アプリ LINE の乗っ取りが問題になっている。アプリのアカウントを本人も気づかない内に他者が使い、そのアカウントの持ち主の友人へ詐欺や脅迫メッセージを送りつけるものだ。

LINE の問題と言えばもうひとつ、1、2年前から「既読無視」について騒がれている。LINE にはメッセージを送った相手がそれを見たかどうかわかる機能があり、「既読」とついているにも関わらずメッセージが返ってこないというものだ。「既読無視」が問題に挙がるようになった当時に比べると大分落ち着いたようにも見えるが、実際には「既読無視」で悩む人は依然として多いように思える。

この問題は「なぜ『既読無視』をされるのが気に食わないのか」という論争にはなりにくい。メッセージを送信して返信が来なければ、憤りや不安を感じるのはごく普通のことだからだ。「見たらその瞬間に返信をよこせ」というような極端な場合を除いて、こういう論点にはならない。「既読無視」の問題は「なぜ返信をしないのか」という論点で語ることができる。これには、メールとは違う LINE 独自の機能がポイントになる。それはグループトーク機能だ。そもそも、最初に述べた詐欺・脅迫や返信がないことへの不安、二人で行うメッセージはメールとほぼやっていることは変わらない為、ここで問題に挙げる必要はない。

では、なぜグループトーク機能が返信をしないことへ繋がるのか。それは、複数人が「その場」にいることによる責任の分化にある。誰かが返信するだろうから自分は返信しなくても大丈夫だろう。この発想が LINE での「既読無視」につながるのだ。これは LINE だけに限らず、誰かがやるだ

ろうから自分はやらない、というのはこの日本社会のあらゆる場で起こっている。「既読無視」はそういった社会情勢の反映の一部なのである。

「アイドルについて」

アイドル戦国時代と呼ばれる昨今、日本全国には400ものアイドルグループが存在するという。しかし全国区で活躍しているのはAKB48グループ、ももいろクローバーZなどごく一握りであり、その他大勢が光を浴びることがなくとも地道な活動を行っている。そんななか3人組テクノポップユニットのPerfumeは、2008年に大ブレイクして以来アイドルとして常に最前線を走り続けている。Perfumeの魅力はなんといってもステージでの圧倒的なパフォーマンスと独特なキャラクター、そして周りで支える優秀なクリエイターたちの存在である。当初は広島のご当地アイドルだった彼女たちがいまワールドツアーを敢行するまでに至った背景には、この3つのポイントが重要であると考えられる。まずなんといってもやはり彼女たちの魅力を語る上で欠かせないのがその楽曲とパフォーマンスであろう。音楽ユニットCAPSULEの中田ヤスタカ氏が手掛けるテクノサウンドはアイドルソングとしては珍しく、またそのサウンドにさらに彩りを与えるのが振付師のMIKIKO氏である。中田氏のプロデュースが始まる以前のPerfumeの楽曲は王道アイドルソングがほとんどだった。そのため大幅な路線変更によって彼女たちのファンはかなり困惑し、そして彼女たち自身も受け入れられなかった。しかしその一方で一部の音楽ファンからは絶大な支持を受けた。1980年代に大ブームを巻き起こしたYMOを彷彿とさせるそのサウンドと、それを歌うアイドルというギャップに惹かれた人が大勢いたのである。そして公共広告機構のCMソングとして「ポリリズム」が起用された2008年、彼女たちは大ブレイクを果たしたのだ。そんな彼女たちのパフォーマンスを支える者がもう1人いる。クリエイター集団・ライゾマティクスの真鍋大度氏である。真鍋氏は2010年の東京ドームでのライブの演出や映像制作に携わって以来Perfumeプロジェクトのサポートをしている。2013年のカンヌ国際広告祭においてはプロジェクトマッピングという技法を用いて、Perfume3人の衣装をスクリーンに見立て次々と色鮮やかなグラフィックを投影するという圧巻の技術力を世界に見せつけた。最新のテクノロジーを駆使し、あっと驚く演出をさらっとやっつけてのける。Perfumeのライブには欠かせない存在だ。このように数多くのクリエイターがPerfumeを支えている理由は、やはり彼女たち3人のキャラクターのおかげであろう。売れないインディーズ時代から周囲に感謝の気持ちを忘れず必死でパフォーマンスをしつづけていた。ライブでは独特な広島弁でファンに語りかけ、テンポの良い漫才のようなトークで笑いを巻き起こす。そうしたかと思えば、長くて深いお辞儀とともにお礼の言葉を述べ、涙を誘う。そうした天真爛漫で謙虚な姿勢がファンだけでなく周りの関係者たちからも支持される理由だろう。また3人の仲の良さも魅力のひとつだ。他グループであればたがいに競い合っただけでライバルを蹴落としていくようなドロドロした戦いが見られる。一方でPerfumeはそういったものが一切ない。それよりも3人の良さをどれだけお互いが引き出せるかというところに重きを置いている。そうした関係が現在のアイドル戦国時代において人々の目に珍しく映り、アイドル同士での競争に疲弊した層に受け入れられたのではないだろうか。3人は今年で26歳になる。アイドルとしてはもう若くはない年齢だ。支えてくれる数々の人とともに、ステージを去るその日まで彼女たちは輝き続けているだろう。

私が一番好きなジャンルは、テレビです。幼いころからテレビにかじりつくように見ていた典型的なテレビっ子です。近頃、「テレビがつまらない」「どれもこれも似たような番組」「昔はおもしろかった」などというような声をよく聞きますが、それは間違いなく視聴者に原因があると思います。テレビにはBPOと呼ばれる倫理面でテレビの内容に問題が無いかチェックする機関があります。そこが行うPTAの子どもに見せたくない番組に上位を占めるのは、いつもバラエティ番組です。私に言わせてみれば、偏ったものの見方を押し付けてくる報道番組や毎回同じ展開の恋愛ドラマの方が子どもにとって有害に思えるのですが・・・

このようにいつも矢面に立たされるバラエティ番組はいつの時代も批判と闘ってきました。しかし、最近ではテレビ局もその批判をまともに受け取るようになり、結果として守りにはいり、テレビ特有の非日常感はなく、どこかで見たことのあるような番組があふれるようになってしまいました。バラエティ番組を批判する人を悪いとは言いません。ただ、そのような人たちはひどく主観的で周りを一切見えていない人に私には映ります。物事を一面的でしか見えていないのは非常に悲しいことです。

私はいつも悲しいことがあると、親に相談するでもなく、友達と遊ぶわけでもなく、バラエティ番組を見てきました。バラエティ番組の非日常感のおかげで、つらい気持ちも和らぎ、テレビに没頭する間だけは気持ちも楽でいられました。そんなテレビをちょっと下品だとか子供向きじゃないだ

とかそんなくだらない理由で汚さないでほしいです。チャンネルはたくさんあるのだから、すこしひねればいいだけのことです。そんなくだらないバラエティを見て、心が安らげる人を考えているのか甚だ疑問です。

読むことについて

文章を読む。小説でも、評論でも、何でもいい。

なにかを読むとき、わたしたちは沈むようにその世界に入っていく。

一人ぼっちで、自分の思考だけを持ってわたしたちはそこを進んでいかなければならない。

それは一見とても孤独なことだ。

けれど、わたしたちはそれをせずにはいられない。

自身の部屋で、カフェで、電車で。

どれだけ電子機器が進化したってわたしたちは紙の本を開いてそれを読んでしまう。

なぜなら、それは孤独に見える作業でありながらわたしたちが他者と一番密接に結びつける行為だからだ。

本を開いたときからそこには受け手と送り手が存在する。

ページを開いたときから最後の一行を読み終えるまで、受け手であるわたしたちはその送り手と世界を構築していかなければいけない。ときにはそこに登場人物が加わることもある。そうして作られていく世界で、わたしたちは現実から連れて来た自分の思考との触れあう地点を探す。いわば、読むことはその行為によって作られる世界と現実との接点を見つける作業である。そうしてその接点を見つけることだけで、わたしたちは自身の現実の世界を広げることが出来る。会うことの出来なかった人たちに会うことが出来る。

マガジンハウスから出ている瀬尾まいこさんの『図書館の神様』という作品に、こんなセリフが登場する。

「文学を通せば、何年も前に生きていた人と同じものを見れるんだ。見ず知らずの女の人に恋することだってできる。自分の中のものを切り出してくることがだってできる。とにかくそこにいながらにして、たいいていのができてしまう。のび太はタイムマシンに乗って時代を超えて、どこでもドアで世界を回る。マゼランは船で、ライト兄弟は飛行機で新しい世界に飛んでいく。僕は本を開いてそれをする」

読むということは、まさにこのようなことだ。だからわたしたちは、読むことをやめられない。(782字)

特撮作品『仮面ライダー』について

『仮面ライダー』シリーズは石ノ森章太郎氏の漫画を原作とし、40年以上放送が続いている特撮ヒーロー作品群であるが、この作品の特徴の一つとして、ヒーローが「異形の存在」に姿を変え、同じく異形の姿をした怪人と戦うというものがある。ここで重要なのが、仮面ライダーは本来、怪人とまったく同じ存在であるという点である。

例えば『仮面ライダー龍騎』(2002年放送)や『剣(ブレイド)』(04年)はそれぞれ敵の怪人の力を封印し、それを自らの力に還元するという特徴を持つ。『W(ダブル)』(09年)『オーズ』(10年)などはそれぞれが超越的な力の秘められたアイテムを駆使して変身・戦闘を行うが、敵の怪人もほぼ同種のもを力の源としている。

また、仮面ライダーの力を行使することにより、変身した者が怪人となってしまう、というパターンも存在する。前述した『剣(ブレイド)』の主人公は不死身の怪人「アンデッド」と戦うために仮面ライダーブレイドに変身するが、作品の終盤ではその力を行使しすぎるあまり体がそのアンデッドと同質化してしまう。仮面ライダーに変身する主人公そのものが怪人と同種である、という例もある。『ファイズ』(03年)の敵は自らを人類の進化系と称し、人類を下等生物として根絶しようとする怪人集団「オルフェノク」であるが、物語中盤、人類のために戦ってきた主人公自身もオルフェノクであることが語られる。

仮面ライダーはヒーローであると同時に、倒すべき敵に限りなく近い存在である。これらの設定も相まって、仮面ライダーの世界観は往々にして善悪がつけがたいことが多いように演出されている。主人公側の力の源が敵怪人と同質なことは何度も述べたが、敵側にも凶行に走る、または走らざるをえない理由があり、善悪が不可分でありいかようにも変貌するのだということが浮き彫りになっている。その世界観のなか、主人公はあくまで弱者のために拳を振るいつづけることができる。異形が存在であり、簡単に悪にもなりうる危うい存在でありながらも、他者のために戦い続けるヒーロー、それが『仮面ライダー』なのである。

9月、テニスの4大会である全米オープンで、日本の錦織圭がアジア出身選手としてはじめて決勝に進出した。決勝では惜しくも敗れたものの、準優勝という結果に日本中が大いに沸いた。メディアも錦織の活躍を連日報じ、帰国して凱旋試合やイベントとなれば、多くの観客が押しかけた。もちろん、錦織の活躍が嬉しいことに違いないのだが、この「錦織フィーバー」に疑問を抱く点もある。例えば、錦織が全米オープン準優勝後、はじめて日本に帰国して出場した大会は楽天ジャパンオープンだった。私も錦織の出場した試合は全試合見たが、そこで気になったのは観客の観戦の仕方である。一言で言ってしまうと、日本人の観戦マナーが良いとはいえない。もちろん、この度の錦織の活躍を受けてはじめてテニスを観に行ったという人も多いとは思いますが、それにしてもマナーが成っていない。細かい観戦マナーの記述はここではしないが、マナーが悪いがために、試合中にもかかわらず大会運営から観客に対して注意を促す一幕があったことは述べておきたい。

スポーツにおいて、われわれ応援する側の見方や姿勢というのは、競技レベルの底上げや選手の成長・活躍を考える上で非常に重要であると私は思う。一つ別の例を出したい。去年、クルム伊達公子が日本で試合をした際、観客がネガティブな反応を示したことに對し、声を荒げたということが話題になった。詳しく見ると、伊達がミスをしたプレーに対し観客がため息をついたことに伊達が怒ったというものである。

もちろん、地元日本の選手を応援することは悪いことではないが、日本人の姿勢はそれとは少し違うように思える。今回の錦織の件も踏まえこの点について考えると、日本人が見ているのはテニスではなく、「錦織圭」や「クルム伊達公子」なのである。極端な意見かもしれないが、そう考えさせられるのはテニスだけではなく、他のスポーツにおいても同じことが言えると思う。日本チームや日本の選手が世界の舞台に立ち、そしてそこで結果を残すためには、私たち見る側の目が求められると思う。スポーツを見る目を養うということを今一度考えてみてはどうだろうか。

新聞連載小説について

日本の多くの新聞の片隅で、小説が掲載されている。宮部みゆき、恩田陸、吉田修一、伊坂幸太郎など、人気作家と言われる面々が、毎日八百字程度の文章を書き、著名なイラストレーターたちがその内容にあった挿絵を添えて、物語を紡いでいる。新聞社側には、手間もお金もかかっている。その分、単行本化・文庫化された作品は話題作となることが多い。未来の人気小説が完成されていくさまを日々同時進行的に楽しめるのだから、読者にとっては非常に魅力的な企画だ。だが、その実、新聞掲載時での小説閲読率は現在あまり奮っていない。朝日新聞 GLOBE によれば、ある地方紙の連載小説は読者の2%にしか読まれていなかった。さらに、日本経済新聞社の関係者によれば、連載小説を担当する編集局文化部内でも、新聞に小説を掲載し続けるメリットはあるのか、といった話が日常会話レベルでは常々出ているというのだ。このような実態があるのに、なぜ新聞に小説が連載され続けているのか。これは新聞社の連載小説に対する姿勢が、営業ジャーナリズムの視点からメセナの視点へと移行していることに大きな理由がある。新聞連載小説が紙面で大きな役割を果たしていた時代は、日露戦争直後だと言われている。当時、戦局報道によって部数を増やしていた新聞が、戦争の終了と同時に読者が離れていくのではないかと懸念から、掲載が始まったのが小説だったのだ。夏目漱石や尾崎紅葉などが熟成させた「新聞連載小説」というジャンルは、日本近代文学になくはならないものになっていった。掲載される媒体自体が作家や作品に大きく影響を与えている点で、新聞連載小説は唯一無二の特殊な小説形態であったからだ。